源氏目案 上

いろは

Genji meyasu
"
[Kyoto, 1654?]

[v. 1]

PL788
4
.G43G326
1654
vol. 1
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551303

一花島序云。あづまうたもろくのうのいとあそうへをえ。
ひとふし　ふみ　ものゝ中にもるゝなみだ。これまことの
水いろあどもさらさらとかく。そこにあるさま。
見ぐけじいよく光をます。我國の玉寶と源氏物語
まさるといふべし。これにつきて。せくのあそびあそび
地とかりて。花島の情をあらそひ。家くの注釋まち
まちまちて。雪蛍の功をつむといへども。なほ善成公
の河海抄にいでゝ今をこむべきあるをもつ
てなり。もとも和中のむねとするものにて。指南の道をえ
ざるにあれど。筆の海よりもるゝ玉ぞおほかる
を奥をもち。詞の林よりいでゝくいぞ多かる

其のころわが氏ひろひおやもち氏あるじもひろい先達の
もてさうそうむざれ浪生のそもざうんでもろくく
ざうんやつゐる恩眼のそうぶ和氏筆舌をのべて筆
餘情とゝゑづくるところもろもろの
宇治の大納言物語云今はむかし越前守為時とて
世をめでたくやさうりけり人いむじさ紀或アがおやや
この為時源氏いかうりさるもの心得るをかしとぞ
女むとをあるやうせうりけるとぞ云ふいの家このやう氏
学問して女むとをあるやうせうりけるに源氏たゝ
ろうこと心得てよつてこゝろざしのちつゝを
ろうとゝもよゝ云れゝまゝとゝろん

一順徳院御記兼久二年一切物語雖多或有宴或記宴也伊勢物
語ハ詞抜事多けれさ乞上ずめさ詞殊勝也大和ハ無下
る方其外無何物語盡もふ覚無其詮之おや源氏物語ハ
不可説物也更非俗人う不為榮或ハ書之始一條院有讃
岐不可説物也或ハ日本記をこそうくうくわろれと
ら仰于時尤清涼殿侍始ハ論言号日本記御方云ふ誠
諸道諸藝皆編ハ一篇不可説未曾有下説源氏哥ハ
方也狭衣哥こそ雖ろれと云人多しと云ハ条心深浅猿
事也更非同日論議狭衣哥もおく不思ハあれども源氏
哥ハ不可及事雲泥也凡哥道ハ知与不知水火者也源氏
ハ第一ろ只詞つゞき抱人ろ不為不可説事也才二哥秀

これ
逸是又何人友之哉三作物也心虚玄盡優美之事
もるべし。但珠見哥又不才説也。但是ハ我朝完上也
詞ハ更ニ人うへの為物也。未知子細うへ奉不可弁是非
古今後撰為大意時ハ則一条院ニとさうへり。私ニ非蓋
通物歟
一河海抄云光源氏ハ寛弘一条院のそぐめに出そて扇和場河院
のまよひのまきにけり略
同物よ云。これもそぐろのおこり。祓くおもとものへどを
西宮左大臣安和二年大宰権帥よ左遷をこれ給しく
若武ノおさなくもなれをもりてさひもげさけ
云。大政院選子内親王村上女十宮よ上東門院へめづらる事

やうやうと、ぐれ行くも、絶ゆるようにて、竹むら、松の古枝、いめるれば、おそろしくて、そうじて、まうでべきやうも、なし。或人のおはせられば、石山寺に通夜して、このごろ、いのりて、おはします。八月十五夜の月、湖水にうつりて、心のすむこと、まさりて、物語など、風情あるようにて、ひけるに、すずろに、ものがたりて、仏前にて、ありけるに、般若の料紙を、本ずゑに、ひけて、まづ、法華の一の巻をとりて、是ようにて、次の日の巻まで、よ、ようにいひて、夜もすがらとおぼしいでて、ひろげて、後は、罪障懺悔のところにて、般若一万六百巻をうづみて、挙納しけり。いまだ、寺にあり、と云。光源氏を

左大臣まうでたまへりけるに紫上御硯など召して周公旦旧君易の古伏かんがへ在納言菅相のふみなどを引てうち出しけるついでにその次第など書かはしめ十巻ばかりにてまうでたまへり伏柴大納言行成など清書をきらきらしくせられて東院へまいらせられけるに法成寺入道前白関書を加へられてかしこき物語ども侍とのこもりの光源氏巻を加へたまふとて誠に君臣の交仁義乃ち好色の媒菩提の縁ともいつくしまで是をのみずくしふるまひ給ふ荘子の寓言などおもしろくさまざまの詞の妖艶さまざまの類ありしが一巻の中に紫上の事をとどめられてこそあるべけれ或巻の名をあらはして紫

式子と号されり。一説云、斎宮の名遁云々。
されど後の名のそれのものゆゑよ。然のごとくめ
らるゝ云々。或説云、一条院のれめれやこのよや。上東門院
へまいりてさうらひて、我ゆゑのまれるゆゑおぼされと、
名をばさはさや給けるよりとぞ。ひろまりて武蔵野をも
ぎりてとぞ。

一物語の時代は、醍醐、朱雀、村上、三代を准ずる歟。桐壺帝門号。
延喜、朱雀院は、天慶、冷泉院は、天暦、光源氏は、西宮左大臣。
なぞらへおもふやう

一照宣公の母は、寛平法皇の皇女、延喜の帝の御妹也。段仕大
臣の母も、桐壺帝門の一門腹とおぼゆ。此外其例多し。雖者

ゑぃ前の准擬誠ようせあらといへどもこの拘忌光源氏
とむれどすぬ狄されど両家なだらに准ずること一世の
源氏左遷の沿ハお同一くれどもこの桜ゑ色の先生とハ
さしてこころえざるや今の拘忌ハ殊ニ小道をおこう
う狄答曰たらちまれどものるらひ大綱ハ其人乃
おもゲあれどもこの行沿ときそをおるゲゃようく
なかれを損すること有し漢朝の書籍春秋史記な
ごいよ実録ともおく有二実同狄
一桐壺帝冷泉院を延長天暦ともずしへをるゲ〻或を
唐の玄宗のみるれるをもまた或ハ秦始皇のうれ
う例をうつをうち又天慶の門ハ相濱の皇胤おりしまる

ねごとゞもゝ多かるうち〳〵に。冷泉院の
御後ろ。（武氏曰ク条有ニ作者意趣一歟）光源氏。女御の古府。
へ。ざを。好色のこゝろ。道の先生ともいふべき。左中将の
風をまねびて。五條。二条の后を落雲の女院勝月秋の
御侍ふやうへ。或いふこと。か将のそこうちをおもへる。又
太上天皇の。ぐう号も。漢家より。たゞ公の旧躅。本朝より。
壁王のお。先蹤を模ふる故。是作物語の習也。そこゞめる
いづれの。時ゝらうて。分明ゝ書おゝせざるもゝ多也。
飛去下ゝ。延喜のみ。時と云心をよくめりゝ。外或ゝ
桓武。一条院を桐壺。門ゝ准じ。又内大臣。御園云を。光源
氏ゝ擬ふるといふ一等ゝ。ふる故。皆ゝ謬説也。若桓武

とつゞく其いご後の帝王陽成宇多延喜のゝ名物語ま
わり一条院まで延喜より後の代の事ゝゝぞ長
上次ぎ巻よびゝ上ばまでのゝ千枝つゞれのごとくま
人集雀村よのゝゝせゝ畫士やゝ山ゝとゝまで一条院までな
生をず又絵合の巻よ集雀院をゝ尚代の由載之無論一本
一ゝ物語ゝゝ本一やうまでゝゝ欤行成卿自筆の本も恐今世
よ伝ゝゝ次源光行ハ本をもて挍合取捨もて家本とせ
ゝ而謂二条帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河左大臣俊
房本号黄表紙左大臣後一条院御乳母藤子本土御門右大臣女
号京極北政所法性寺関白本号青表紙等也各雖備本皆
大条三位後成本京極中納言定家本
有異同ゝ勘合古本且可加了見者耶善者従之尊之義也

有異同歟今古本直写

一黄表紙 俊成卿 青表紙 定家二条家風ニ奥入計ニそゝむ也
已達耶為也云々為相母 阿佛為氏継母也 奥入を切て添ふ
也或説奥入ハ仲行ノ作也それを定家ノ注を加ふるよし云々
一河内本 河内守大監物源光行ノ本を以て挍合取捨して
家の本とす仍て也

一紫式ア 母常陸介藤原為信女
上東門院女房 或鷹司殿女房

内舎人
勧修寺家祖
良門
閑院左大臣冬嗣公六男

左中将
利基
兼輔
堤中納言
雅正
刑ア大輔
正五下越前守
為時
紫式ア

勧修寺内大臣
高藤
兼茂
女子

此式ア後ニ右衛門佐宣孝ノ嫁して大貳三位ヲ産
仍て宣孝ノ子ニ成親町ノ南京極西頬今東小院ニ向也

院ハ上東門院ノ御所之跡也。又武ノ墓所ヲ雲林院白毫院
南小野皇墓の西ちかし

一源氏をうるよ心をつくしてもの感者必妻の心を得てて覚悪
き得てハ好多のうるはしきばかりよりあるよ源氏をだに
なをしてて覚ゑ

一凡ゑ十字怙の参名よ空の意あると一ち尺句をとりハ二と
ゑ哥をとると三ち尺句と哥とれ二をとりて空ち尺哥よ
も句ともち手ゑとれ名ととると天台の教よ四諦法門を
一ち尺ゑ門二よハ空門三ち尺亦有亦空門四ち尺非ゑ非
空門也一切の玄教ハ此四諦よ出ず。これよりて故ニ
諦外別立法性ととし尺ちと真實の道理ハ玄教の外ら

よおうべきものもあれども

一一巻桐壺　句を名となす

桐壺は源景舎也。此曹司にうつりて光源氏の母御息所を相壺更衣といふ。仍巻の名となせり。一名壺前栽。何もあれまへのつぼせんざいの盛なるをいふ

二の巻帚木　うつをを名となす

はゝきぎの心をもつてその系の道なきやうなるをいひあらはれ

并一空蟬　蝉のぬけがらをいふ

巻の并のごとくいうつゝの抜殻なり三の并。暮日祭。又

并ふ吹上巻　并勅使勤宝

并松のあれどもなきも并

一怙あり。此の例狹乳并の揩一偏と同時のごとく
もろ〳〵横縦をも同ぐる代名もあり。是を縦
并と云。空蝉の寒是なり。うつゝ演払ハ横也。未摘
も縦横ゐ変ある
并二夕顔縦のあるべき也。并と訶る代名とをる
心おてそれらそでうら白露の光そへうゆふ分のそれ
三名歟。并を名とをり。若歟とつゞき多ハ訶いこゝぞ
あるつゝていはしこもん歟のねようひろのべのもろくさ
并未摘等横縦のあるべきより并を名らをる
おもうさをと代るにあるめこれ未摘等を組まれる者
四知歟哭。訶を名とをる

伯山琴と紅葉折とつづきて浄瑠璃の琴のくんの巻

十九紅葉折とあつて苅萱桑実の巻ともいふ

大巻宴　初を名ゝるなり

十南天のさゝらのそんをさゝを結ふさいなり

六菱　うるを名ゝるなり

はるやへのさゝをるおりひめ神のきり机ふとを初けら

七榊　哥どことゞ伐名ゝるなり

神ぐらさゝらすゝ枝もるを和といふまぐへ事あれるさるよそ

八岩敬置　うるを名ゝるなり

九次广　哥ど詞を名ゝるなり

松ふる氏あまた名やもいるらん すまふ人ふたりあり

十明石 哥ことばを名ころも

ゐげさつ明石の海よ秋雪のふるやと人をおもひやるらん

十一澪標 うた代名ころも

うら浅ゝてふかうもあらまほしきまでもめぐりあひがたうおぼゆ

第一源氏生 様のふるまひ也哥と詞を名ころも

乱れ髪も我そといふめもちまろくかきやりたるもとの心を

第二関屋 姫のふるまひ也詞を名ころも

関屋よりもはるゝ山ぢ ふたりすゝむ

十二繪合 詞を名ころも

此巻よ絵合と云べきよし詞あれば是ぞよりて乃

おもかげをおもひやりたる
歌の句わすれ後拾遺集の句よ
ろしからんかたはらに
十三 春風 哥と詞を名ゆるす
万葉にて独人れうの
十四 清雲 哥を名ゆるす
入日さす峯よりいでし清雲いもせの
十五 橿 哥と詞を名ゆるす
うつせみの妻もてれば橿の
十六 乙女 哥と詞を名ゆるす
乙女子も神さびぬれて
十七 玉鬘 哥を名ゆるす

恋わたる男にそれるれば恋ひ〳〵ふるすらを見ることあり

第一初音組のるゝびや・哥と詞を名ゝきる

手月を松よひられてあゝ人よゝふ鳥のこゝろもち

第二胡蝶組のるゝびや・哥と詞を名ゝきる

恋そのこゝろふとさゝへやもゝ夫婦まつ虫いうゝくこゝろ〳〵

第三蛍組のるゝびや・哥と詞を名ゝきる

声はきて方をのこゝろ蛍こそいふもまゝろひあるゝめ

第四常夏組のるゝびや・哥と詞を名ゝきる

るでゝこれをゝるゝきををゝばもれそれを人やあるん

第五篝火組のるゝびや・哥と詞を名ゝきる

篝火よゝ絶をよ恋のそゝもゝこそせゝ代ゝそれ

并六時(のりき)分 縦のちゝび也 羽を名ごそう

時(とき)分例(れい)のごとくうちもゝあり

并七御幸(みゆき) 縦のちゝび也 哥を名とそう

うちさゝ〳〵あさぐもりそらもさえやらぬ光やいろ〳〵

并八蘭(あらそう) 縦のちゝび也 哥と羽ろ浅名とそう

おもひの〳〵やつる〳〵蘭あらそいの行よかざりこそ

并九枝柱(まきばしら) 縦のちゝび也 哥を名とそう 或ハ桜(さくら)べと云て

今いとてやどれめさとちれとうつまさ風ふく〳〵秋をこゝろか

十八梅枝(むめがえ) 羽を名ごそう

てんのせうやうのうち

并ハ将梅ごうりて 梅がえいざ〳〵ろいとおう〳〵ごあり

十九藤裏葉(ふぢのうらば) 羽を名ごそう

十 夜のうづらのとうちどんでまくらおもり

二十の巻上一下哥と詞ゝ紙名ゞをもり或ハ比下巻をもゞゝをもり

十 小松原まつひこひこひこ

廿四御法 哥を名ゝるもの

しるべせよ法のゝりの舟出して世ゝをわたす中のちかひ

廿五幻 哥を名ゝるもの

大空をうき雲かくす幻の夢ゝをさめぬ月の清水

廿六雲隠

此巻の名のみありて、其詞いまだ白氏の巻ゝにひとしく

れ給ひし後ゝのことゝもなどかあるべき故、雲がくれ逝去とのみ

と也。万葉神亀六年、右大臣長屋王賜死ゝし後作哥

万二ス六ノ

太皇ゝゝゝ

一、二三子陸居一話てその〳〵崩れ一のみ〳〵残れ山巻よ句
あつべきうべき也抔巻の名ぞうるて句をうるとハ天台
の円教の法門と例よ引れどうる我地ぞうき心ち一体うれ
ば島〳〵一話也山巻よ八九年のことこそあるうる
廿七句宮句を名うるう或ハ句ぶつけ一名薫中将也
例の世人ハ句ぶつ薫中将ぞ来にくひぞてうあり
等一句梅縦のうるび也句を名うるう
東のてもう彩うる句梅のいとおもうくとあり
等二竹何横の井也来ハ縦也等ぶ句ぶ名うるう
竹何のくうちよ一一ようよ心のそこいもうるも
廿八橋姫 宇治 十帖等を名うるう

ろ〻姉の心をうごかしてうきをさまさんの事を袖ぞぬれぬ

廿九 椎本 哥を名ゞもろと

立ちよらんげに木ずえ椎が本ぬるゝ露をも袖にかけぬれ

三十 角総 うるさくとゞめを名ゞもろと

あげまきにちぎりおきてし string を結びこめおくすゞ四五もわもいもん

廿一 早蕨 うるさくとゞめを名ゞもろと

こゝろ尚いとけなうしてのわらんべのわるさにたゞ哥のさわぐび

廿二 宿木 哥を名ゞもろと 或一名 貝鳥

やどりぎとさゝぬ先にぞいまゝでの旅ねもうきもつらきもの

廿三 東屋 哥を名ゞもろと

さゝともろ哥ぐるやさびさおづまわれおもろ社ろ哥ぐるさゝ

廿四浮舟　哥を名ごそう

たちばなの小島のさきにこぐ舟のうきたる舟ぞ物思ひやまぬ

廿五晴嶺　うるさくこぐ舟名ごそう

あちこちてよる舟ごとにとれどとれどゆくゑもさだめぬ浦の秋風

廿六夕照　こごとを名ごそう

てるひとのつとにぞ四ケ有ける

廿七夢浮橋

花鳥に玄ぴ恋の名い哥ごとを詞をもてしづかごとやも。

一ア名目し。空句ま料簡して。そでこ釈しをつけ。

う紀もこい古哥の詞ま世中い恋のわこちのうさ橋

ふそうかとそうま。恋のうきはしとはべるう

そもそも細河海物語（ほそかわかいものがたり）おほくあれども、（いづれ）の巻の終（とう）のことばもうちうんぬんあれどもわれともうちうんぬんやわるとうんぬんと、うちの母のうちにのうちのうちにうちうちうち

源氏目案巻之一

い

一いづれの御時にや女御更衣あまた候ひ給ける中に

いとやんごとなき際にはあらぬが

すぐれて時めき給ふありけり

一はじめより我はと思ひあがり給へる御方々

めざましきものおとしめそねみ

給ふ

一同じ程

上﨟

更衣

一朝夕の宮仕につけても

人の心をのみ動かし

恨みを負ふ積もりにやあらん

一いとあつしくなりゆきて

一里がちなる

一御局

一桐壺の更衣の

一あまた

一いとはしたなき

一早晩

一助

一いとゞ

一諫

一禁制

一いとゞしき

一つゐに

一いとゞしく

一心細き

一いとゞしく

一ほどなく

一限

一すぐし

一心うく

一いつくへ答也　一いつくまでも　一いつくまでも
花鳥也　一いつまでも　一いつまでも心也
一いつくまでも心也　一いつけるまで幼稚也
一いつくまで恥也　一いつくまで体也　一いつくまで昵懇也
雲の上人ともに男女共に昇殿の人をいふ也
一いつともなくこころ　宅着也　一いまだ　今将也
一いせいつくまでゆきようまでをいふ　要之哥未勘
伊勢物語
一おもてむきまでは　一おもてむきまでは居立也
一おもてむきまでは　一おもてむきまでは倚ま也
一いつれまでも　いつけまでとも　僻見也　いつれまでもといふ

為家の説和歌ゆひ付が冠人のよろこべる心也
く 家眼の比女を深く思ふ心也
一いさぎよひ勢也　一水六日いつゝむいろ　よむべし
一いとまこと強気　一他の心ひろく池底也
一いひそれもよせ名ぞのほまれある人とも也上る
いひそへる心也　一もろこしの紙ある文　青いろ
懸書をさしこむ也　一いうるふ優ある也
一いまはくもれるもとうし　三界唯一心万法唯識の心也
一いひそへ流るゝいふ心也　言葉いひそへぐ心也
一いひしろひ　ほまのひさる猪也引ろふよろこべる心也
一いへぢとおもひけん　馬吹が前の女を遠ざけて後に愛する妻也

一いまめかしき物の声　管絃も笙の音もうちつゞきそゝろいそがしらんとす。今様うたひすゞろなるそらごと

一いふやふ知るもの　一いふ外伊勢寺と外といふ

一度長官も次官も職掌おほくさおほく諸國守關乃時も外長官の度を執行せおほよりて寺を外ともいへり

一いもうと系兄はおれともおれ女せい男の事ようく法也

一古今の序ゟすきれとの事を天照れ神のこれことをいふ

一いざこゝろもけう人へのわざいふれ也

一いざ〳〵俗ざうりやと云心　一いむ忌也こゝろふこと也

一いでばさびいまけるゝと　うつをこのまけぬべし

一いらえゆげるも伊勢外宮ゟわろ時ある而白書ゟもう

一いとうくいとまもうるもや　一いむこもれもるう受戒もうるもや

一いさいざよへとうるもや　一いさよ月やとうるもや十六夜や

一いさよひさよ夕の山の端よやとうへて出るおやひへるもやすうるもや

一いうへもいうへもあるまじさうれ落るや

一いぬるもれういぬるもれるやいれうるや

一いされりれやれや　一いへうく鴿未草云頭短俠色

一いうへうう心にうるや心や

一いぬき大云昔い女よをおてざうざうざこもきるどいへり

一いぬる十日去る十日や　一いうけるき　うづの一声ハ啓乃

うるをきうもうるおまよるづむい源氏の我身をさして

うるうふるう泥えるうもいぬるうもうるうや

一いさゝか ちそふ心也 幸
一いちじるし いやさかふ心也
一いのちのながき事 老の字
一いさゝか 聡 利口なる心也
多落
一いまやういろのえゆうすまでう 花 今楽 今やうなどは梅のこ
とく成也 ゑらんでうるさく知るもあしゝ 又梅もうめ
とよそほひ 江戸まで売るゆへ 今梅をといふ 大略ゆる
すと同しこと也 えゆうすまでう 其のごとくなるゆへうれる
梅ゑらぶ 外うりうるゆへ 一いもをいもうと 世ごう成也
仲蕣諸仲蕣冊者 兄弟和して夫婦と成ごとくなるゆへ
をいもせといふもと
一いつゝのみ 良家也 種性と訳
人喰べし 指家 竿上 簡の家也

一つつく　有職也　又右族也　一一院　寛平法皇　ようずーみづー

一いつく　冊　風也　ひせる　子代　こへうり　令婦　かへーも　冊

一いこづき道ちちこと　後の世のひとのーーとつくら

一いづれそこ　小野　冊　花のえん　小野ーが系ー風　ままそかけ　ひ　家のやどうとまま

めうーうるべきいとれうる

一いれれいつきうづく　也　一二条　おほ　院　一条を西へ　り　給也

一いこすぐ　冊　生霊也　又うづ　哭　リウ　のーこと也

一いちしやき　早速　さうそく　いちはやき　すこやかこうる

一おんみうび　掩　オホフ　サシ　韻　古詩の字をふるぐ字　下句　ミモノク　ミウジ　の末字也　何

文字ご　推　ヲス　して　時　員　ともかも　ヤウニ

一院のおとうふぐこ　何　いづれの　ともうす　家　イヘ　花物語よ　岩倉　ヒカ　と云　ふれ　廟　ビョウ　の

一 又 春のころ 青幣 白幣 日本記 又五色幣あり
一 家ともる 雛家三面月落涙百千行
一 石山 聖武天皇 金鷲仙
一 人建立云々
一 めひ拍手 将襲 拍手
一 孟冬 松崎 天暦陵を心ざして言ふ
一 いろ〳〵のうてぐら
一 いつ〳〵のにぎわひ
一 いろ〳〵おもひつゞくる
一 孟冬 いはひめて
一 哥 松風
一 いくへ 張騫漢武帝使ひして槎よ来て天漢の源を究
一 らして孟律よいつもて午女をまて神をいのるら
一 哥 いさらわ 小井 日本記

一一世の源氏　源氏と訓てめり氏一世の源氏と云也一世源氏
任官已後即位例　光仁天皇元大納言以外多く略ス
一いまひとつの給ふ一つ　奉つぶのごとくや一説好ましからず給也
一いつちをー　いつちとは海そ臭をそ臭也我身のことくとなる
ひとつとごとく物なのごとくと海士のいつちびとまでへ所なるを
一いびき　鼾睡
一いつへを　礼楽とうくうつられうと尚れ代を祝のくり
一いうふ　一向也
一いつくしく　一家うちかよまいうふ備衣也
一いはくも雲の光とこうの給　殺人漸く如登二春臺一　註恐和也
一いまめかしうすくよれ事　未濃き只れ事れうびう上ハ白く

すべて紫或は紺よき也　一つゞら心ごゝろ　古今序

一絃ひくる女の事　一いたつらなる人や　第六を指

一うるはしき人を云歟

一服若沙汰の心を含みて碎空破の空理よりつゞく方等

一ても空清乱をすてを今畢竟皆空と説て投ぬの機をゆり

一うへても空不念のうちをもへのふ是をつゆもそめけひと

一のもれと云へれ文服者ふるまふ歟　方法不如の心ゆと云

一つゝみ　鞠

一家ゐのまゝにて　常侍よい家

一くまなくて家づとのやうに心いれ者人をいはゝうるさゝ也

一いそ〳〵いそぐ〳〵の心也

一いも山　渚の橋奥の山也　文をう

一いるまぢふ句のこゝろ　三位うち紫の衣を

一ふるまぢふ句のこゝろ　末濃うち山事かうさひうち

ゆへよ加階のこと紙ちう　一つやくちく敎心ちう
枝のこと
一つこちめ　れ　うけこつきく人れと云心也
一家だいきのぞむ　女三の家司をらと云て帝王女選二叙人事一也
一つきまき　きき氣巻　息巻　の紙いづ　いうか良也
一つこへのこと　滝瀬天皇也紙治治こちこ忠仁公をそこひ
それをあつけ治事を云て　それ女三をを准すれ者也
一いのちこて　命いちもこちも也のこれ紙ちうれば紙ちいもうど也
一つこれば　篤と法式ふたて猫を女三こ付する也篤と云ふ物也
一いだこれこ人　猫こて女三をこひ出ていくち猫をこして云也
一つこふ　文めくこちも也
一つこれ柏本　一つまけこて　こひいち紙こみちけも
一つこれ夕ぐち　こしくる消ぐ海

ものと成べし。況ん女人も不留もまた
一いはんや女人の小智をもて今いくばくうるほし
ますおもおもばかりの名聞をもとめて夕雲の
愛さけ世の愛うべし
一池の蓮 時移変生。楽尽悲来。毎至春之日冬之夜池蓮
夏開宮槐秋落 長恨哥傳
一いはんのごとし 女人身形
ニ五障一者。不得作梵天王二者帝釈三者魔王四者転輪聖
王五者仏身
一いまもろもろのおもひ所謂
竹川
一いまもろもろのおもひ 一つの日をもへて 還城楽陵王を
あやまんと欲。日の暮れよ。攪して日を午にかへさんと云。
史記云晉陽之戦迴落日
一いろいろ宮殿楼閣立

一いろいろ淺葱　おくれのうそふくそ服者の袖そ心ひやる也
一そうけう　大忠の服衣也　一いぢくとう　ちんの奇に勝へて、
ぞとそうあるうて、家こそれ服者の家そうめうと
一つものごも　ごといれの字也　一いけそやもうぞやれぞ、その
字濁てうべし、事ふ本ふ子をもうせうと
一いそせの森のうそ鳥めうう　人ぢてとあうそ、人ぢてうぞ
さ云心ふ打へてうそうう、薫の中君よ、一枝をのひーとの給ふやう
一いうぢうふ日をーそう　鎖日不出
一いうづをふ　昔もそくあひつれとも、無実変也、大忠もめぢそーと也
一いぢくとう　今の本儀ぢ也、ぞこぢうとそうう　崇神天皇抵戦の事や
一いうちれ仕うん　触ぢ也とうぞ、ぢ私也心やとくれそうぞ、又心もと

ろうそくたてやうに心もとなきやうにやりて事をとる事

一いぐるみ　伊賀刀女也　中媒也　ろうめと云狐をいふ

一いさかけ　夜ざとい云心也　一いげくるり　白雲のくるめ山さと云

一ろくろ首也　一家をもえいぐ　錦織とても也

一ろうもれ伊勢ぢさ　真実の機はおらずして使ふひすゑ

一いろろ海　いろいろもろもろぐ　世俗と云頃也　けさ心をこすろや

一いりへの扇　お宝うみやうとてお宝もろもろ也　冬の扇也

一いちの否も　将政関白否也

ろ

一ろくの物　緑物也　一ろくのうるひつ　緑筆櫃

一六条ろくろ　れ息否の夏始てお出をろ　古前垢の小方也　新好乃

中宮のれ女也　一六十巻といふ物ハ玄義十巻
釋籤十巻　文句十巻　疏記十巻　摩訶止觀十巻　弘決十巻
一六位の中にも蔵人ハ青色といふ　今も極臈の蔵人ハ着る也
六位すくを　六位冠者とゝく　すくをいふ事ハ
一六条院ハ　河原院を模するもの
一ろもう　多論也　一六条院ハ　花鳥春ハ　本ハ別
業也　陽成院ハ　おりまし　ろう　冷院と号す　陽成
院の山荘多のれ門ハ知もの　来雑院れ門を指
給ふ　六条左大臣雅信公の　ろう　長恨比れ堂
閑白　賢淑　給ふ　此物語ハ六条院ろうとうろう　比叡

一六条院ノ御在世ノ間ハ曹司ハ二条院也又六条院ノ内ニモ曹司ヲ賜ハリ大殿籠リ讀経ノ
ホカニハ一六ノ御修法ノ外ハ七僧ヲ六ノ僧ノ中ニアルベシ
ヲロガミ奉リ唄讃ヲロガミ奉リ
一ハ
一ハ常ノ御事ハ多クコノ心ヲ以テ准ヘ
一ハ公ノ御事ハ一切ニ准ヘ玄宮坊職員令ノ御門
ヲ守ルヲ以テ准ヘ
一ハ天皇ノ御事ハ皇子ニ准ヘ
一ハ日記ノ夏皇子三歳ニテ袴着ノ例冷泉院天暦四年
七月廿三日ノ御時ノ外例多ク女人ノ日

一はるの末　氷を薄み　ふりつもる　こころもちなるべし

一はるさむき　将寒く　肌さにこもりてうむ　病もあり　膚の寒き也

一はるぐもうういくあり心　一はるぐもまねれ門と東京とれ

こころなしらむ　むぐむい養育の心也

一はるとをくべねをうけさん　左天頼作北翼島在地頼作連

理枝ノエダト長恨哥ニ　一はいぜん　陪膳也　平位貴人

のするお役といへり　一はくまもなくてぶて　ひぶたの

句動むぐ　ぬぎのおりはもり時い皆人それこのみおぬぎ乃

なくてぶよろこ給べきと今いぐぐ招事あぐぐこ心幽べし

一はるせ　導士　一はいいぐなりのよ　親主以下来

服の拝舞　清涼殿の東の庭ぐてれ前へ伽事拝あり

一はつてうさ　草筆のこと也いへり

一はぶうさ　不首　一はやうまくのこと也やう

といへり音の事也　一はげき　勵　念也心也

一ばんきでう　盤渉調　冬の調子なれば物あはれなる音にて吹べし

一はうそくるの　傍側　あつかましき心也　飽足ざる故也

一要るべきものの　入るれば入へき也

一はくく　股ぐくとよむ

一はでとん　中節　常のことくに皆おもしろきを是いふことだ

又なろひやうよろしき也　花鳥に下かうしろを投るぐそうして上よりとこをつりて前へおろすやうにもろをいふ車ともとゝ下ととゝそてまうへのもとゝをおろすを中節と名付しる也

一はくわう 兄弟也 同腹
一母こそゆへおろべくれ 松風の巻ニ
大井の為 兼明親王ことなり 弘法の女ニ准じて心うべし
一はくまつ 松ともうす 栂ニ紫をもつまとうめ 心同也
一はるちがき 教書文字ひらがなにてもかくなり
一はべーてん をこづもて
一はぐろめ 花鳥山海経云
東海有黒歯國 其俗婦人歯迷黒染 今案日本ニ東海乃
中ノ國也 按俗ふるくより女ハ皆ハ
それをはぢれば古代のおしへのごとくして 紫の姫君も十歳
よりおまるまで歯黒めをするとそ
一はかづら 仁和寺河の行幸次第ニ八条院為御寿ニ

一はかうる　　　

車あり。碁盤・山茶・山機・海松・青苔の石二並びをれ
髪ながくうつくしきをみるやうに一冊ばかりや
うせさうへよいあんべえさうな絵のさうしのやう
なるが綴ぢうつくしくそれどうひろうとなる
一ぎやうごとにもえんぎうれどもんび何うも冊
所祝の心その名也只喜ばしめでたしまいらせんの心なる也
一八省ありて作りけるう孝徳天皇大化四年二月始置八省
大極殿とは八省といふ八省ともいふ八省の本院なり故
也朱雀門の内一町よわう南限冷泉院北限中和門東限東乃
坊城西の坊城を限也出車八省の廊よ立つづけうべし
いづれ車八人給の度也一回り目をつぎうたうぢう

いぐ〻車ハ人給の意也　一白虹日ヲつらぬくたゝごとく

前漢書曰音荊軻慕燕丹之儀白虹貫日太子畏之　燕乃

太子丹が始皇をころさんとするに今源氏をころさんとするの

況本ヨリ日ヲつらぬくかと一角云〻日ヲ白虹ヶ貫義也白皆

とつゞけてよむなとそれ〳〵ふしんそのこゝろざしすげ〳〵

しき事を荊軻をそれになぞらへ源氏を荊軻にたとへたる冷泉院を

太子丹にたとへたる句也　一善秋のれうそうう　春秋御

讀經同云源氏のところ〴〵治定也

一源氏のところ〴〵治乱一動禁中ものさた

一はつ〳〵のまく〳〵のさうび　薔薇頭行葉綴春艶階底薔薇入夏開

一はつ原をは原のまくらことばなり　逢もまつ恋〳〵くる人のまく

ひるもとをし

一はちぶのうす紙　鉋をかけ

也繰唐紙

一はるゝ　柏をそれ也

ひやうしぎ　さゝうあもる

一ばちぶさ　叡眼そゝうも也

しめい　よろしきふ

しく明よ蝶吹拂心也是ハ洗ふもて寝

一ゆくゝゝ

ゝゝゝゝそ　朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇子

ゝそれ女皇れ女中宮溫子昭宣公の女也兼明才一親王ゝれ

更衣腹故人臣也仍例ゝ

一ばちぶさ　おやよ手愚親よ賢

きのまゝゝゝ兒況愚子半

一はるゝゝゝ　鼻の動ゝや

ゝくや目の動をめまぐろさこのみぐゝ

一はぐゝゝ　齒固　元三の日の夏也齒ハゝゝひや射ゝゝそよ

めゝ齒固ハゝゝひそゝいむゝ也高つき六本ゝ杯ゝ也一の者よ餅

大根樓ゝゝ也仍餅ハ近江の米ゝゝのゝゝゝ餅を用日ゝ其國乃

鏡山の哥を詠じて
一は つれなうこゆべきおさるさま人
一巻よおれつ俗よが代なりと
しるして文書哥をよせをこと
玄心也
一方等彼の中に 方等経の中よ
四教をもくべて多くの祝のくち是ハ浄名経ホ也ヒ時昔のこと
をもつゞめ今ハさらともえ変不化の衆生さゞ元弘ともうち一會
の衆生ゝ雲霞猶如して加葉迦葉三子よりひ三子界へ法声感光
をふるふと玄心抄
一は称をもくべ四皓朝におけの言
羽翼已成といへり
一はちうちのぞで 放おこゝろ花鳥
元弘不逢寝覚ざ云て母屋の内代ぞ多志ゐて中を隔てゐ
ぬるうへとひいふ不代云也れ帳障ま立そへふるを中のとこ也
一八条或人のれ方 仁明天皇れ子本康親王を崇上の父文よれ

一巻のうち 校さへ 鼻下
の心やうん袖は姫 恋のふれ 焼物ふれば袖よはるくるいのさま
ワれ上
一巻のくむけのめさ袋 すさうさ袋也 三月の雫ふれば 巻末巻
ゆくさ 初さ袋 旅ものへよ袋へ入て 送物也
ワれ下
一はつちまが 花よ ゆつまぐひうち 新い 衣の納受のうちうち
うちつ心うち
一巻 秋の行幸 勅親行幸をいふ
一巻のことのごとくは 巻の初よりは大変ふれば ぐれうつにふれん
うち 源氏のつく初くく覚也
一はつうちふれ 股黒さ也
一巻のうちうちのへて 蓮花也 一うちす 葉汚 事也いおるで
蓮巻と ふれどもうで今日の別ふるうちさも也 女三の法事より身
とうちうちて法事といふうち 會 僧心也 雪花菜

一羽衣の　羽衣いまこそ袂よりつれ　畢竟皆空と悟るの心也

一袈裟の香よ　袈裟の香ほのぼのとして　身を離れざるの心也

一はつ〳〵年より後　非家乳にして　ながくへも後生のおもひ　しばし得脱

一松虫　松下の妙大明神ぞ也

一すゝむる　太刀也　守の心也　一説

一乳房もうしなひ無法

一袈裟ゆゑに　殖路もなし

みそぎ　迎の車もれば法陽轉ずるべし

一はうるゐや　中ノ巻の除服をうるこの心也

一栄花ものがたりこと　ひぐのことこと巻をみるべき事を

一巻のもくに　不退花中偏称名号ノ華ヲ　ヒトヘニアツメヨトノ千サトニオヨヒヤリ

一はし山のこと　大乗のゆゑんを説んこと　東ヤ

一盃ざるや　浮舟の如く早下ちくる人也　救助の時は早下ちくるゝ也

よく文をこゝろしる也

一はんさい　犀角のちがひめがねにて見る也　班犀皆犀角のちがひ

節句に端午の日班犀をもつてするやうなることの節也

一芙蓉　女郎花の名はおくちもちらとうへてのちいふひめそこも実はようこうす

一はすのこ　蓮子数盃と詩にも作りまたの名也蓮子のやうな青磁盃也

一葉のうすきこと　陵園妾云新笑如花含小葉　白氏文集

此詩は君恩のうすきことを云今物初のは命の長よのたとへにけうきこと也　まけるきこと也

也微也ゆけるこゝろ也
一二のまち　次の町と云心也　一にぎはゝき　富貴ある事と
云也饒贍　一にぎやかなる　俗人なる也
一にぎやかなるひろき　まちでのことなり
一にぎわゝしてわすれぐさを　更にそゝいでいるとの心也ぐさ〳〵なる也
一にしの　西詩也　一にしき　錦二種と云心也
一にびそ　祖母の服衣也三ヶ月の服也　一にびそめ　純衣也こまやかなるといふ
一にびのうへと云也
一にるゝ
一にんそく　仁王會　七難即滅の文あるゆへ
一にんそく〳〵　子孫繁昌の心
一にびのうす　服者の事也

のへらもうよびなの卵を用ゐ化らけ、ます子のごとくにして、おのおのうへんでんや、惟八是もよびのろもの

一にほ島　入学也　一にほ島よ　鳴島ハ枕詞也、けをるゝぶる島也、若ごもよ、あやめとうけをるゝぶる也、宮敬ご深くひきわりるまでごとくつゝまハ若ごも也、まごことなる也

一日本記　次巻始神代至持統天皇御宇ニ

一西山ものれる　仁和寺と云也、光孝天皇ハ仁和寺ニ御幸

仁和年中よりはじまりしよりハ仁和寺ニ号をう、又彰平門

ハ天暦六年三月ハじめ出家をして、四月より仁和寺ハ遷れあるゆゑ物

語の朱雀院ハ彰平門よ堆して、これをハ合書ル也

一にほのうみ十方　後崑西方過十万億佛土有世界名為極ー

来ト門休陀経

一わらひもうくろさゝへのさゝめ
ごとさおよ白ひるゝと云也そのうつくしきをいふ
くびすじ
そびの袖ハ長上べの下襲の袖ともこゝ
一にげりうくろ地身ゝそて ゆさ〻れの声ゞれ息耳のくゞるに
さゝそよおろし地身ゝ笛とうしてのゝふこゝろゝと
幼
一におさ〻我ぞろうる心
一にゐでさこれゝやゆるべき
遊仙窟 容顔 似閨男潘安仕之外甥気調如兄崔季珪之
妹 乳調のいさゝかい兄のごとゝと云何ゝそいくへゝろ白玉
の気とゝへゝ女一玉よ仙のへゝ白玉の兄ゝそいくせゐゝ
さ云心也 手一ふ〻ゐ女二ゝのれゝゝやうもよひとゝを
をゝてゝゐゝるどいふ我ゆへゝる心ゝろべし

ほ

一ほい　本也

一ほうげ　火氣也

一ほうさをもらへてゐる也

一ほうゆがめて　そくそくもくもくめ也　方曲也

一ほこころ心也

一ほのたち　ほれうまちし

一ほのめり　まいまよひ　我心がまい添へてぐるぐる心也

一佛のれうべくさう入滅も　從冥入於冥永不聞佛名

一佛いとのけうぐて　上の句ほうげのれうべくとある、家と、私

一法花三昧とこゑふぐれんぼうれ声山おろし
上就よ空種三昧わいくゆり常行常座ゆ行ゆ座非行非
座四種也法花懺法ハゆ行ゆ座の三昧也懺法ゑ天台大師
或沉等式ゆそう終ゆ六時よ六根の罪を懺悔ゆる法文也
六条有房つ云懺法の曲よ山風のおろしゆゑ瀧のいと
ゆゑとつふ口伝のをゑをひそへて書そう音うく女房ゑ
そう伝ゆるよ今ハ此名目をゑゆる学そう伝もをそうやゑこゑ
一ほんそうくそう 係曽呂俱也
一ほそろく 弘と云心也
一法衆三昧普賢大士 南無法
衆ゑ
衆ゑ三昧普賢今指ゑゑ大士ゑ同ゑ也法衆衆生普賢ゑ同体

と云事也

一ぼけられて　われる心也

惚れけり何也

一れ事を結ぶ　ぶ

奉の事也　何事とても出家ほど

一ほうぶつ里にいまるみちめる　花

ろうろう心也

一郭公なく　四月文雲外語　三三更後雨中声

一佛のいとうるりさ心也

一ほうこうげ　ほうろうる心

一ほうろ　仁徳天皇の代時始て

一ほんさいのうぐ　弄　也と改

一法しいひろど　覚善倍

不二の理を悟て衆生のまよひを速に翻さんと発心修行
心なく仏も報身の姿をて終行の報をて是又うかりそ形を
て況や三界唯一心の法なれば仏の内証あらそれてうれば則菩提則
煩悩也純一実相うて更に別の法なし
一ぼくいくばんなう 仏の内証あらそれてうれば則菩提則
一のほそびけくもれ 絹擣也 一ほくくく 波 驚く波也
一ほんますべき 玉と女の本と定むるそ
一ほのうち 一ほうかな 朗あきらかなり
一ほそるが 来迎女のそうらうぞ也 そこその物也 若行道

なれ・おこるぐ〳〵ども茫闇也 俎して 綑を付るも

一佛のごとくの 仏躰よ滅度志ものへども 常住此不滅也と説
給也 不滅をもちるぐ〳〵 分子 遊欲ぐ〳〵 尼公の心を云也

一ぼんしゃのふ 梵字也 一仏のおるぐ〳〵ちやうぶい花れ
帳蓋のうへよ 仏ごおるぐ〳〵 経の机をれうべし

一仏のおりまする而 観経云 阿弥陀仏 去此不遠 極楽荘厳ちもひ
やらぐ〳〵こころ也

一仏ごをもちものへ 塔の我事を
のの也 一ほよいでめ 中ごのほよ出ぞ

もて 下に地ごひのきこもんぐでての母也 ごのずきい ほよ出め
地おれば 西ごう落ごこ云一義也 一ほうるぐ〳〵 その也

一ほうげい 経云 實ごう者 不誑妄者 云〳〵

一ほうけい経云 貧窮者不ニ設法ニ者ヲ

一ほうしょうじ（法性寺） 負信云 建立ノ心也

一仏のをんそこ 仏のいましめ給ふ事

一ほうくわ ほうめうとうの心 名香の蜜をすくうて入てやく事

一ほつえ 末也 一ほく 反台也 ほんぐ ごとくしへ

一へんぐう 別納也 前に立つる所也 曹司人の任也

一へんげ 変化也 一へいちう（未詳） 花平定文があざ名也

一へいきう 平仲 宇治大納言物語云 平仲が女のもとへゆきてくちをすゝぎて 硯の水入をあとところもとめて 月をめでけるさま心ふかくて 雪をとりて入てちやをたてゝ 硯をとりてそゝぐ

我ごそけく〳〵と付ぎ〳〵されを人なすこつくいろ〳〵にうやすこけんされこと
あるの
一こんにき　文字れへんをつきそいろ〳〵ろうとこを申すを
をもろ
一へいしーるぐこう　親子こやくこと也
ロれと
一へんげの物とるぐしーるーこと　河海　四生の中れ化生と云べき
こ
こ付されれぐ人界ハ初の時こそ化生なるどハあるとも
しかれ今の変化こ云ハ仏菩薩の勧力或ハ定力ようて
ゴウ
ゼンろ
ゴウカン
ソノカタチ
ケン
ヘン
ホテイ
ミロク
ヘンゲカ
サンニン
カエ
タノ
ヤマ
ニン
ホ
ナツ
クニンリキアルニハキョウリキ
ケ
ショウ
ショウ
ショウ

めして、具(グ)して於(テ)神前(ニアルニ)東海(ヘ)ゆくことをせつなくも、それを陪(ヅ)
従(ジウ)とは云(イ)ひながら、弄(モ)び戯(ザ)れの陪従い、近傍(コノエ)にくらべんこと
一 哥すて虫
へぶてちく 女三の我(ワ)はへぶてちく契りても、添(ソ)ふの心(ウラ)こそ
うもづさされ心(ウラ)や 哥あげまき
一 へぶてちく 心(ウラ)ぐるいなる(ナヲトウカン)ニ木綿
もれぢらいぐさなる

と

一 そうりか
一 ときめき紀治 時(トキ)めくいろを付(ツ)うてよき成(ナ)べし。生人(サヽク)
恙(つゝが)なくと忘(ワス)れ
一 ときのね 宿(とのゐ)
一 ときよえもれものの結(ゆ)う涙(なみだ)
一 ときはやくされ心(ウラ)や
一 ときげさや 何(なに)ともこぐる心
一 ともしびそうけ 長恨哥(コンカケツタ)ニ 孤燈挑盡未成眠(タハヨニテ)

一さうんもうき　屯食（トンジキ）　ばくさいなや　今此島のみこ同し
一ところ江　あをげさや　一ともまろまろ（もろまろ）　本妻（ホンサイ）ようとも也
一こごろうさんばーの心也　一ろうやうさん　乞出（トリイダ）ーやうさんの心
一ごごろ共（トモ）也　夜ごろ　女ごろ　昏（ミナ）夜（トモ）の事（コト）也　万度（ドチ）風云ことわり
一ごごろ恨も　狩馬（サイハ）乗（ノウタ）事（コト）ハ　慌（クワウ）也ちやうハ　悦（エツ）也
一さうもうくて　無動（ムドウモク）也　一さうでのみ　乞出（トリイデ）給也
一ろうきょ　戸（ツベド）ぢまるもちたるかな　妻戸（ツマド）ぢまりけれ也
一ごさ面へく　外（ホカ）ざまへ　まろ心也　ごごろごろろべー
一ろけごろろー　此（ミヤスト）息（コロ）ハ　始（ハジメ）つれろろー　也
びーぢて　ひさくへーとづれざうんいとおしさよ
一ごうまざろいさをめて　ところをごごろやうり

ちひいれど。おぎろ〳〵するなり也　一ぎやうのこゑ　僧經聲（トキヤウノコエ　ソウツ）

ゐるべし　引声（インシヤウ）あるべし　經行（キヤウカ）

一さらに　外（オカ）也　一さらにおもて一さらびおもふ

僕曇華（ウドンゲ）の　夏（ナツ）　人壽八万歳（ザイ）の時節（ジセツ）　金輪王（コンリンワウ）　遇（アヒ）二四劫一（ヨカウ）　其時海水半減（ナカバゲン）するようにて　出現（シユツゲン）するなり

一さらさらまうる　獨鈷（トクコ）　一といめといふさうす　史婦（フウフ）の

中よりいでたるものゝごとくなり　一ときまる　ときまる　ひ　ともる　ともる　ひ　滅（メツ）　盡（ジン）　寂（ジヤク）　滅（メツ）　樂（ラク）　滅（メツ）　盡（ジン）　寂（ジヤク）　滅（メツ）　樂（ラク）　滅盡寂滅樂（メツジンジヤクメツ

花夜のうつりあひづれもうれうさ殿舎やむまれうさ
ひらく凡人もすますず塵よむまれうさ
一とのゐどころふとうたげうさ花鳥夜行するを儀よ人
乃至人ゐ。おれ席の前うてこはだうれといへる吹べしと云
一うらひとりと戸 花鳥 小山羽根扇云。宿申・宮子時・左陣 每一
訓夜行・丑寅刻 右陣勤む。丑刻物節 人申宿申姫
申 略す 一うらひとりに虎・狼
一友ちうる 我ひうるとやへいよ鳥い友をつれてりうれ心やこの
一うらひ添もて物の人ともうふ事もやおうんとせ
一とうれ 知人也 一とぶやうに死狂よや。そやうせ
一うらげいうりうさ波風う乗十三歳の時・遣唐使うて。

波斯國より到る。琴壱挺行の者也。阿陵羅琴を造りてあ
へて変あらず。花うつくの拍板。うつくしきもの也。おも
うへにうつくしき悪風よりおこりて波斯国へ行又梅檀木にて下る琴
をとりておそぶ処よりおこりて琴をとるとき極てくらく霧雪をふら
天地をうごかす。日かくれんとして名をあげる也

一うれう他の節會　宇中の節會也

一ごしんれいご　この笑ひ子よそへ宮親じ達る也

一幸ありて　落雲係閑の夏三月まで也

一あるの大そやう　大政大臣内大臣新任慶の事故

一ごうゆのまたき　箏取由也。ゆの者也左のまうて法ごと

一事あるべし

一うしみ　年忌。一説ごうしみ。

十よとつゞけ云々（とよみつ）年満也　一年月へだゝりぬれど（おもひ）おもひ
いでゝ　此句末摘花の事よりの月日（つき）へだゝり夏をかけん為（ため）なり其
後の事をかけり　一哥（うた）　そへて　哥の心面白（おもしろ）く聞（きこ）ゆ
つゝの夏（こと）を思（おも）ていつゞけられさいもいなごわたり（わたる）より坡（ばん）迄
つゞれるは神をつゝしみ心（こゝろ）なんどや盤（ばん）の心（こゝろ）もこん（ふか）くを忘（わす）て
よまれば（おもひ）心（こゝろ）ばかりまでと（おもひ）句（く）とも書（かき）寄（よせ）らるゝをもての哥（うた）を
我返哥（わがへしうた）とて寄（よせ）らるゝ盤（ばん）のいろ〳〵むつかしきをあつめやう
に云（いひ）なすなり
一哥（うた）　あつ門哥（もんか）　松よる
調（てう）子（し）也　鳥（とり）の子（こ）ら感（かん）じて　笑（わら）ふ鶯（うぐひす）　池（いけ）の氷（こほり）鳥（とり）も囀（さえづ）るこそ也
一哥（うた）　こゝろわざ（こゝろばへ）もさへ花（はな）こそ有（あり）い近（こゝ）情（ろ）を云（いひ）なすなり

一梅雨ところてんあふうちわ奥や音ころころ心や外
やすゐこなうてや
一そうめんうれしうまうけうる
一茶家の宣旨ある内侍のすけ
女の宮や宣旨と内侍と兼官ころ人や汗湯まいる人ある
べし
一年ごと七夕秋の神まつる
明石入道の孔子教文を外る孔子くり入
ありさみしうる
一ころすることくも 誓古すこ
こどもの変や
一時ある雷霧をみて看河海うつ
月の一ごうげ琴をけうまうる。おごのうへのうごうごうごう、
芸のごくごくまうる今一けうまうる六月中十日九祖る雷みて、
まれごくこうてみれ門おけうておごろそその治げこと乃

もくべいえづくりさるやうに見いるくさえよせ、あこうの
門の引戸よりぞくぞくと雪みちをふみこみ入いるさまあやしくめづらしき人のたちゐなり
一うしもせめられバ辛くれのせまりうし心也
一うし汁と 牽牛後三辛よるの如
一うしのせう 源氏論代記也 注釈書るいふ雄犬ハ雌雌よりおほくうしくと書を鳥ごいへり
一このおすぐろきをとり髪をさげうしろにてゆひきりてゆひ束ねたるを総角童髪ど人のすぐろきを
一鳥のをも 正前云一鳥不鳴山更幽 山みさこうろ也
一ごうぞくれて不動也 一さくれあり 辰日也

一こゝふさを　常盤（ときわ）　ともいふ

一ともしび　灯臺（とうだい）　一ぢ代（よ）　十代（とよ）　文（ふみ）をも　何（なに）

てをも用ゆ　ほかのかゝやく心をもて行（おこな）ふ

一このもの　てるひめ　自愛の童名　俗説（ぞくせつ）ことに書（かき）　女（をみな）をば文（ふみ）など

の宮（みや）を呼（よ）ぶ　こゝろなり　尊（たふと）の意（こゝろ）也

源氏目案巻第二

ち

一長恨哥（ちやうごんのうた）のれい　白氏文集（はくしもんじう）の内（うち）なり　玄宗（げんそう）の楊貴妃（やうきひ）をしたひ

給（たま）ひしも　今桐壺（いまきりつぼ）のれい門（もん）の更衣（かうい）をしたひ給（たま）ひし同心也

一長生殿（ちやうせいでん）　玄宗（げんそう）のれい妃（ひ）の名也　桐壺（きりつぼ）の巻（まき）よりこれをとれり

一ちりぢり　家（いへ）ぢりぢり

ふしみや　座主ならでは　こちらの縁あり
一ちいろこも　みちのく　陸奥の心ぐみあるべき
紫上やうく　ほとゝぎす　心あり
一ちやうふぞうーちやう　延喜式云　仁齊内親王降行豫定
監送使　參議一人　或ハ中納言　弁一人　史一人　六位外官人一人
陪從云　大臣着陣定ノ前　大中納言各一人　參議二人　四位四
人已上　勅使中納言參議各一人　四位六人　長奉送使中納言
若參議弁史中務丞各一人　已上裳向下外記云々作式
ニいふ　花今栗群行の日ハ前ニ勅使ら尺河原まで供奉
して帰參して　長奉送使ハ伊勢まで送りて帰參也　上
洛の時弓場殿よりすゝりて下着の由を奏門

きれいめ 召されうる由 職(レキジ)事して仕うる事也 河(ガイ)指逆集乃
手の詞をうつす

一ちぢのへうなるもの

七十老(ヨワヒトナヒスカクソノトコロ)致仕懸其所仕うる車(ヲ)者返任(ヘンニン)執政(シツセイノ)官(チニスルノイ)例略(リヤク)致(ヲ)
仕(さ)いふい七十よるりて出仕すまいことによりてひるもちぬ
うる車をも先祖(センゾ)の廟(ビヨウ)へこれをうつる意あるを故(ケン)に懸車(ケンシヤ)の
齢(よハヒ)こといふ也 官(ツカサ)を辞(ジス)さいへども政(ナヲニツリコト)事あうつるへきうち
河海(ガイカイ)よりうれうるかことおほけうる

一子校つれのもの 千校常則 生高名保共に益工也

一長(ちやう)恨哥 王昭君 楊貴妃(ヤウキヒ)い馬嵬(バクワイ)ようしうるれ王昭君(セウクン)い夷(エビス)
狄(テキ)よりつぐり仍(よつ)ていうし給也

一ちうちうすること 琴(キン)を弾(ひ)くこと 琴(キン)の名(なト)めて

ちう．琵琶そでちうじ云　一中将のくるのけうそれまづひ．
八月四日を荒手番．八日を手番云く夜．手結也古近乃
真手結也．八月八日よりおそれちう夕雪中将右近ちうあそ．
とのごぶを引つれてまうんずる由ノ沙汰也等をまづひい馬
ゆみの時．二人ばくりけて射る事故
一ちうぐんよるもめべきいづ方をつゐ心也二仏の中乃也
一ちうすきちう　透ちう也　一ちう半地鋪ハ唐廷ノ大敗
高驟へちうけうち物也　一ちう快賞　書物の快也
一ちやうれうつぐ院の廊のちうぐのごとくにひけちう
人ちうべし
一ちいとちうちうちうを乳ち
ちうめを云也ちうちうちう心　一特佛　特佛堂ハまうぐて

貝上被人

られぐれども先佛供養の用意也

一ぢんのよい棚也ちんい沈也　一ちやうしぞめ丁ま藻番の墓名

名字　一ちやうさまを卫　近衛大将

一ちやうぎやうきれ丁　ちやうれんもちやうこと云心也

一ちやう組い玉ちやうぎやうまきやうちやう組いきやうちやうにまぎりる心

り

一りむじれそおそひ何そても　ちやうかの事をする

と　除時ちやう云也　一りむじれ系の祖ふかえ義乃

除時の条十一月よあ分事也　南日い中の間也是を小条

ど云也祖ふい年日也　内喪そてあ鬼

一りちれもちへい律い秋をけちさぢる女も秋をつちさぢる也

山ざくらハ十月ぐれご冬ハ秋より属て
一柳花苑　上古ハあり舞也今ハ絶たる
一りんでうさやく　容ときやくごとくべし　六条院大臣ありて
摂政の職を奉うけたまはりてつくろひ
玉ふ客人の亂舞をいとおもしろきものに
一龍頭鷁首　竜ハ水をこのむもの也鷁ハ風を心ゆかすや故
此形を作るや
一りうをびづさ花地うこう
ア乙を次呂ハ黄律ハ秋也日本ハ呂律唐ハ律呂本ハ律呂也
云律ハ陽呂ハ陰助也我ハ備るホよハ呂律ごとくして律ハ
すゑ黄をもつてとし添氏ら律心乱調曲をも得るおもも
ものごとく呂律ごと律ごとく次ますゑもの得馬まる付呂律ごと

付うと・本朝倫倫のお治まる・呂律を陽陰と用来云う

一りんのる　ホよ弥栄る代りをつりんのるさ云也

ぬ

一ぬうきざすべし　ぬさすべうううるう

一ぬうぐく　警首　額突　礼拝也

一ぬさ　稜麻　挽うて　道祖神よる仰ぎ也

一ぬもてまつれぬへ　原のつぎをまれこぬすこもて・さうぐる

さてへい行路也

うてそ云也

そこ云心よ叶へう

う祈也

一ぬわうううう　沼てるぐう

一ぬてへ賊・貪家をうかぐし

一ぬさうけう　狩純の衣ぐる

一ぬさうもあへぐ　玉ハ糸うてり

るざうむかねもれどもぬさきめもの伏るれども

る

一るりの玉　玉びらの童名　一るい　親類やう
一るそん三がいちう　流轉三界中恩愛不能斷・弃恩入空為

を

一きらひをこしめいひをこさんとする心や　隔
一お目もれごもりすごして　夜着專寢晝同輦　長恨やそ
うつくしやせし・文衣のそのまゝおのみや
一をゝそろれいをゝしひろ心や　河掟
一たゝめ夜　納夜　在後涼夜　佛ゆるりまいろ拍をおさゝひろ事
一をよすけもそおりすろ　助及成人の儀

一をよすけまでおりまする 眼及び人の

一れさまでまいりまする 葬(サヨ)也 一れうれしいこと 鳥遍(トリベン)を

云也 愛石(ヨタギ)

一れもぐらもちさ 面目(メンボク)ら

一そうしうちかぐらしれ 押立(シタテカドくシ)

ぎいくるしみ也 一れまれ 日本記 俗(キ)よ氣だうさる

一れも 祝詞(ノリト)也 物語(ゴセン)也 暗(シモ)

一れほやけ 公(キホウケ)

一れぼして

とおぼしうるぐ云うおぼしぐ 一れりまする 夏(ゲ)の衣(コロモ)

あるようて心うべし 一れりまする 夏の衣のひとへ

清淨(セイジヤウテン)衣也 御(ゴ)衣(テン)さへ云也 東屏除(ソノヒサシコビ)ひさしまするべし

一大義つくる人 義人(カミ)のスの大義(キヨクラクキヨウ)つと云心也 天人(テンニン)

一れでまいりまする 元服(ゲンブクイゼン)以前 赤子(アカイロ)の袍(ホウ)の腰(コシ)

也。元服ハ後ハ勝ヲ為ノ袍ヲ着ル也。又後
着ルモノヘラ　一ニ狩衣ト云

一ニ直垂ト云　左大臣ノ源氏ノ裳ノ上ノ事ヲ云
ヘリ　ニハノ下ノ裳ヲ云ヘリ

一ニ大口ト云ヘリ　袴ノ裾ヲ括ル紐ヲ云

一大うちき　袴ヲ着ヌ物也。是ヲ大小ト云。男シ束帯
ノ衣ノ如ニモ大袴ヲ着ル也。大袴ハ男小袴ハ女ノ着ル也

一打ひ切ト云ヘリ　打懸ト云ヘリ　常ノ形ノ事也。
ニモ折ヲ着ルベシ　西宮記云　本物枝物共
菓子也。餅ヲ云ヘリ。落栢ヲ云ヘリ。菓子ヲ入テ。木枝或ハ

よ付や 大ぢ 半ゑて 後ろ付 勝アて 後ろ 例をろ 元服の時
の人のうげろ 祖やぇろ　一れほうとの 大ぢ 男や
一れほるく わんごろの心や　一れうろ 初ろ
一れさく 例ど云心 或い頃 又い更ふど云心や 花 優長ろう変
や 面向ろうさろ 伏もぇや 有ようろべし
一れほどれづろ 油火や　一をのがろ 何 各競 八雲抄ニ云
ろれくあろ心やぇろ　一れほぞう 大惣 ようろの心
一女のろれいもとろんつくまでさい 女のろれいや もとい 休字や
ろれつくまでこほ あろろうごつろ
一れひろ記こもわろ字のうち 親の家ゐわろ行をぇろう 苗
揚家有女 初長成 誉在深窓人未識 長恨哥

一花ほろ紀　大やうよりどろもや　何穏（ネホトキ）

一女こそそもろ〳〵ま〳〵　女院ろ・法皇とおろ〳〵ろ

ろ（タキ）ろ・或ハよりてろなも　一大ろろ　十の花・七八とれ心や

一花ほろ〳〵ほろ紀日心や　一花ほやけでろ〳〵ろ〳〵〳〵

ろ（ヒジン）ろ人ノ恨（ウラミ）ろどろ事や　一をこご風〳〵・嗚呼（ヲコカミシ）・ろ紀ろを云

一花どろ〳〵そろ〳〵　おそろ〳〵き心や・驚（キヤロク）の心ろもの〳〵

一花い〳〵ろ　おとろ〳〵き心や・風ことろのやろ云ありを

一花ものもを　面月（メンボク）ろ〳〵ろ紀也・俗（ゾク）よりろ〳〵ろどろ〳〵ろ心也

一花そもろ〳〵　歌遠（ヲソシ）文選・どろまり〳〵月・うろ〳〵おそろ〳〵き心や

一をそろひら月を　小指（コビ）をろひろや

一花ほいろろ　ろや心也　一花いろうすおり〳〵ろ〳〵ろ心也

一をそこくおぐやうる心や　ゆうやうる心や

一をそこめそて　皇(それ)のうごく心や　おうそうほうつそを云

一にもう一有(コザンド)れ産(コ)有や　一にほめい俗(ぞく)うぼけ有(ゆう)ごい

心や　うそんあうくうそ紙おぐやくそを云や

一にほれおぐやくそ心や　一をそこへそて　ひれをおさへうる心

一をそこまそて　うけうる心　一にほちのう海(タイ)路(ヂ)や　れ路(ヂ)(スホチ)　大路(ヂ)

一をのれひうるうれまもひうけうる　ダ(ヂ)ぶそんうそその

縁(エン)そて　おうれまもひうけうるそつへう

一をそうそうへ遠近(コチコチ)や　一をそこう　病(やさ)のうくあうるそ　病

かをそこうると云や　行うそても学(タイ)(ク)うそ物忘ををそこうると云

一にされびうる　義(キヂ)ざれと云祝(サツ)もる　をうそうる声(コエ)や

一花ぼをよ　仰(オホせ)や　ひつけよこれ心

一花ぼけるく　失心(うせごゝろ)　我(わ)よりあるあこそ花ぼけるきといへり

一あるこゝろの人　行人(キやうにん)　やこゝろひ

万葉(マンエウ)　おくまへどころあり文　奥(オクノ)日本記

一花ひらくん　ワらまい　紫(ムラサキ)や　露(つゆ)と　危(アブ)の男ふるへくうかこん

そこるきと付紫のことをふ人(ビト)浮(ウ)るれふにるうこゝろ心やや

一花るでさ後(ゝち)ふ　紫のよも源氏もおるでやうにおこと

これるうとのやや　一をこゝろひのらう　行労(シンロウ)や

一花ふくれ(コレ)愛(カナシ)や　一花もへどもな紙(カミ)あるぐわし。

夕ぐれの巻つゞそこゝろうちへしくゝへどもとふふれ

一花もふくとゝる　副(ヘイ)ふるへ人のあるうとや

一大のちっちゃき尺八の名 河大筆 簫詠尺八 猶仙吉 長一尺八寸 呂署小分・律ノ旨ニ書圖云・大筆簫小筆簫・又云尺八為短簫ト 玄宗皇帝ノ時ニ羅漢地ニ好吹尺八被獲出云ル

一ハくいひそく 此墓 秘色・今の茶碗也・秘色ハ磁器也・越州ニ別ニあり此地ニ翠青にして殊ニ晴ル・仍是を秘色トいふ・越州ニ翠青ノ器多シ・故ニ秘色ト云・うつはの地紙よりして・常ニ不用也

一ハくのつき・今案ひそくいわ伏き茶碗歟也

一ハぐるまぐに せるうなどのあるそれ也

一ハぐるまぐるう 正月十四日の日よ・家中の猛き月よぶんして相ほそみこ舎ぜうるして・大家をめぐりこいう男踏哥ごいふそれ也

まるべうと伏いふてる・今の世の子私方ニ来らそれ・踏哥

を学ごつくり花鳥（ニダシ）和音（ハツヲ）の琴（ニキン）の

一おりひるをもを上の句（カ）あくるあくるんごつへ（ニ）家（ヤ）生（ヲ）るをも

をとゝ云也　一おほろ（ホノ）のつ

いあれ（あれ）ゝゝゝゝゝ云心もち　一れんげくかくいと月　尼（アマギミ）云九

月ま幸（ソツキヨス）玄（ゲン）如方いと月の朔（ツイタチ）るゝようて十月晦日ま除（ヂヨ）目（モク）

ゝゝもの也　一おほしゝゝもの事　桐帝（キリノミカド）を。

源氏のれまゝ見ゝもの給もの也

一おびの中将のもちもつがれるをゝるといふをみり　花鳥

駐（ニユル）直衣（ナヲシ）人音（オビ）の直衣のゝれと等ま用ゝる也今の世も直垂（ヒタヽレ）乃

れ等いれ引るをゝのゝれとをもちゐるなふ夜（ヨル）の直衣（ナヲシ）二蓋（フタアヰ）或花（ハナ）

田（ダトン）ゝ云ゝようて着（キヨ）ゝ源氏い宰相中将（サイシヤウノチユウジヨウ）ゝ二ゐゐの袍（ホウ）頭（トウ）

中將いまうちうれど宮ひそくようて、こ紀二盖の亜衣を着用すべし。宮の高さい宮法のうとともうね。宮のひそくいわくさうと用うるこひ也。袖裏葉は參う。夕参宰相中將のかてのう。源氏の表のうふうて、非參議のうどうるさわへうて二藍いうけれどのうへうの非參議こい二位三位うど紀中將というふうてう夕参い八座よ昇進しのうるれば花田のうてとうさうべきこと心也。御の參う。源氏の常とうて二藍うるおびのかぞうまうれてこあうい頭中將こう紀二藍うれば、此亜衣うういうこひ也。紀亜衣の常には下襲の色ともうね。禁ノ人冬薫芳面白掌裏濃打綾夏二藍數知うく今を亜衣とうう侭ごの人いう紀一のうを用べうるうと。亜衣

そろへのすがれともちみろい略儀(リャクギ)ぞえしかろ

一れはやけどもはくそうしてぐみはうえて次中将(ジチュウジョウ)賀茂(カモ)三(サン)

ようち宣下(センゲ)のことどうけ給(タマ)はるやう

一をうしそにもん身(み)のはかちあろうれよせんらも

一れうぐうろ 臆病(オクビョウ)の心や 一れ(おれ)をぐ 源氏のをがといもん

と尊(たっと)ぬ給(タマ)ふようそれのをを入うやう

一大うこに 尊(たっと)のすぐろい源や心ををくい心をうろう心や

一れはえすぐろ 常(つね)の袖(そで)より指貫(さしぬき)を着(き)して裾(すそ)をりいろれつ

れの袁や直衣(のうし)裾(すそ)をうろいえぐけるれ出立(いでたち)もいつべし おざれろいされろいつもその心たがいろべし はきみい玉の字

や大人のするちぐ心ちする又直衣(のうし)すぐるを利(き)はきてす

あとよく統あり　一あるじおうな　源内侍を源氏
のおうなぎみまうす時うぐいすを放ちやる
一おうな男ども　一おうなやそのてぐるま引
花村これ女親王　親王多　天延三年二月廿六日
内侍徽子女王　童明親王
皇后宮昌子内親王　徽子女王つぎつぎへて
あひそひて下仕の例ありたにもあるべし
一をらめのわらは　未通女子百廿女　日記しる
一おうなあかつきめしを　僧
一おうなども八雲おさめて下女也　ミくりやに
仲よし　紙捕て下女也　不浄のもの生女の始二幅をめしわて

夢ハレ
夜の帯を結合せて、ひれ丸をひらくようにおもひ女ひとりさ
云ふ(誰や)
一花ほそ夢 秋主神京の時 大和
路をへて 摂津より越て 難波にそうろうへて 七日より大江の儲所
より付給 十日より入京 給や 故に大江夜半敏衆が旅館や
予れ代一夜秋夜の旅ありれば蒸あるかいくるや
一思賜のれ衣いの面こうに 去年今宵侍清涼 秋憶詩篇独り
断腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拝餘香 聖廟の作
一れそいれ分をもれそず れ門の浮よれぞみくる変ふ前う
そうろうるれど給ふ給ふそうろう
一花ほい夜 大炊夜 新撰永記 巨炊屋 旧記に多大炊屋と書也
一れめうづくれて 業雀院のれ門うづくれ給ふそ 三条院也

れめうぐひのうるはしきをうるへし

一おほぞら月星の光や　七夕祭よる波のみ秋立りをそて

星のひかりをうけしてうるおひなり

一をのゝえさん　晋王賛石室山鬼数章ヲ囲碁ヲ質一物ヲ

一おれもれ　をろをろもれをろ　舜ミや

一をのゝえさん　晋王賛石室山鬼数章ヲ囲碁ヲ質一物ヲ

一おれもれ　をろをろもれをろ　舜ミや

一おれもれ　をろをろもれをろ　舜ミや

一をのゝえさん　晋王賛石室山鬼数章ヲ囲碁ヲ質一物ヲ

九門大臣ゟ一位ヨ被申也 依一位也 聽手車也 寛弘八年八
月 左大臣 菅原朝臣 案内 手車ニ入 待賢門上東門ヨ云ゝ
一 わたくしけるとてみすぐ ゝのおすぐいねおろすぐ
のゝゝゝゝ
一 をびれゝ おゝかびれゝゝ
也一説大やうゝゝ心ゝ
一 わたるぐゝゝゝゝゝ
各留半座 案華 盛 待我 簡 法照禪師 同行人 ヲ 魯潛
一 さゝのをびけるまぐう 手 昇 進 人の迎付ぐゝ 心
一 わゝゝ おぐゝゝ心ゝ
一 わゝゝゝゝゝゝゝ 九字 角 昇下ゝゝ心ゝ
一 位下の云迷云ゝある大饗ぐゝも 人数のかゝ 夾
ゝさんぐゝゝゝ
一 わたゝ左大臣 關大臣 轉右

政大臣に仕(つかまつ)て忠義を心(こころ)に存(ぞん)じ外(ほか)に多(おほく)の例(れい)を引(ひき)て要(えう)
一おひすがひ次第(しだい)〳〵の心(こころ)やおひつゞきの心
一おれうすまなき事(こと)
一おくたるさ　臆病(おくびやう)や不学(ふがく)なれば
一おれうりうけ向(むき)の給(たまは)ふやうに候(さふらふ)やうに　法成寺(ほうじやうじ)の院(ゐん)へ
一おうしかぶとの緒(を)　春経(はるつね)曰(いはく)満而不溢(みちてあふれず)
一おり目(め)やけぶくろに候(さふらふ)やうに　左右(さう)の騎射(きしや)
一おりをやや中(ちう)の的(まと)を射(い)ず
一おるかぶくろ　六条院(ろくでうゐん)てハ珠数(じゆず)を馬(むま)のうしろの的(まと)を射(い)る
一おるかぶくろ　源(みなもと)の後(のち)の名(な)ハけぶろと
内大臣(うちのおとゞ)の玉(たま)を取(とり)ねぶりてうぐひすと呼(よび)給(たまひ)
一をゝこと　大薬二巻(だいやくにくわん)若(もし)得為人(えてひとのために)聾盲瘖瘂諳誦斯(ろうまうあんああんじゆしの)

経故薩羅如是ノ法
花

一のつきなやもぢずれけう氏　論語曰
子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養
不敬何以別乎

一をこうあひだて　風痛教や

一大原野の行幸　延長六年十二月廿日大原野の行幸を模し
てかうらう花島委略ス

一おれくもうさ　ほれくもうさや

おれてをもう同心

一おほやけざまそてうす有

女つくる私ともを立出行てそなさるれ立用給のこの
職ぐちにのりいぐちくちくや又されごも人ぐ
ちもうそとちう

一おちうぐう父　落栗をや

こうさ紀の持ごろう　仮名　記の事のうまうや
ちうそう段

一れみくもいは月ニハ　三有ればハ月廿日ぐうべきれ　花以誤れ

一 花もまた 蘭は若衣の心もあるべきなり 夕も五もお安の孫なれ

一 女はうつろふ 婦人有二三従之義一専用之道 故未嫁従

父 既嫁従夫 夫死従子 故父者子矢也 夫者妻矢也 ほれ慕ふ

れども 又妻と父あり 引き分けがたし

一 をうつりつけて 姫 老女のごとくなり

一 花もまた 心哥 密通の事をいふなり つらばゞ

のりよみをもて人の例をひくとは人の妻をもとらば

おもはざるにされこゝろもあるべし

一 花もまた 中道は玉への通路なり

一 花もまた 鳥は巣に二夜ゝ宿ぬ 玉を鴨ふとは

卯の一不見ふたゝびとへだゝり

一 花もまた 思前

一おもてくてぐす筆札（クダスフデカクコト）ト等ハ書事也おもてくハうつもり
さゞ面もれぐさうらハうまぐさたうふれもの心れ
一おほれぐさぐさぐさ　切灯臺（キリトウダイ）そうぐさ
一女のくさてもんうこ死人も在（クンヘイノアイカイ）寛平遠誠よ。た大将時平（トキヒラ）
先年於（テ）女事（ニ）有（ヨシ）二所（ヨ）失（ウシナ）ぐる　一おほいまうちぐさ　門府（ダイフ）ハ
改大臣（ダジン）もれバ。おほきおほいまうちぐさことのみべきを。おほいまう
ちぐさみぐさあるとぐ。ぬ（ダニ）れを日事（ヒゴト）といふ
一れぞのつくもナニぐさ。文冬くのれぐさそ。夜（ニテ）例ハうの人ら略て
一おぐさ和のつくもあり。何（ヲキモノ）置物札　唐羅（カラノラ）来濃霞（スソゴノキボヒ）
一ハ位（若ト）よりぜのて十八年　十八年ノ在位（サイヰ）清和（セイワ）天皇の例也。
花島秀（ヒデ）死（シヌ）ル妻（メ）

一女ハ妻とおもれもみぐさ人の

女感陽氣春思男　男感陰氣秋思女　毛詩

一おほくのさまざまをもろもろ同くすべくうつのべげるや

一をさをさてひろさうに物人の心ばうに物たたへてのべたり

一おこそゆくそもろもろれめ　在山哥にてよをそいるる哥やいづ

これ文字心ばやをそてうぐさやそうく私云山哥の結句なる後撰集

一女の方にれおるでつこもうさ　我も人もおるでつこもうさ

もれい女でこやも　女人為業障　但盤注略う

一おやのけうこもやれめくら　親の為に菩提をとくしこまうさ

一をくふえ物よ為をそくこ多　笛の役物ふえ物あるべし

一おほやけのおうさ御まうさ　近衛大将やも

一 哥久こゝろ
一 六ろくこゝろ一夜教よあひだひとりぶそぐそくそくそく

一行ってこば　茎をらくこべ折まさくんされやや
一行らうあづれて　おちそづれさる心
一行ほさそ　王氏の四位也　人目わづさ忍ぶ
一行と泪れ　泪ぬれ日心さや　弁ちるぐるむをび一神丸
一行く山の　松葉の雪ハ消てもみやせ　ハ雪ハ消てもりまちさき
心ゆべし　松葉の詞　服者のなぐづ
れも萱草　文さ代黄文也　唐さやまさひさるを　むづ一さもい
うさもいふ祝言さ云　一行そうこさ神ぞ女の嫁すべ
き時かすぐろハ鬼魅ちぐれ　ハ幸を妬さ丸
一行ちぐさ代　月枝ハ姫君　兄弟也　ちりてうゆるの心ハ大きく
深さ恥を大きいづれる心ざ一のひくるぞされ也

一 千
[illegible]
[illegible]の
大空に旭名高くひろきやの心也

一をいろうさみて ちらしもどもをぶひらく書のべし

一なれどころ也 扨てまれなひしおごと古ふいやりて白玄
へ張ぬべし・ろいろそそゆけどそのが幸也ろが中ろいさ
もろめとや

一八絃の数なや

一神功皇后紀に到大井国松浦縣而進食於玉嶋里小河之
側仍止之也俗云点心ひて酒をぐいすろや

一れいや納しろ心や

一れすまし をぞまし可れうらくろそろしさ心

一れほぐれ扨うろ心のをくしさ心

一にくげのるるところ　なのあることや

一れてうげ　言への神をもちひてこれをこと宣給いふる

上龍のれるところをこうらあるぞあることや

一れぞうべき　お中まで生長給かものそうくまをもげんと思

うるへけろ

一をひきけ　迎き

一をもやひつん　仰御物語よ。鬼一口よくのそうり。仁渓云小松

帝時仁和三年八月武徳殿の松原より鬼食人是則大狂や

一大うこのろう　日本記　漠濛

一をもろべー　けやい我も共のれをこけまでもやや

一にもれごと　約言や　一女のすぐよ　法華経云　又喜薩

摩訶薩不應於女人身取能生欲起相而於彼法云若

女人 説法 不聴 歯 矣 不 叶 智 臆 乃 至 五 法 行 不 親 等 況
復 餘 事 や
一 おはされ ろ 髪 の みそのうぐ
れ う 針 や
一 おはする の 出 家 い や と の る〳〵
ひ ろ れ ど と 名 字 計〳〵 を い ふ ものそ ふ れ や
一 をの〳〵ど 私 納 おくびやうおろ ど
一 その 地 をろ ふる 老 や 一 たい〳〵く 老 や
一 をいふれいまして をいふ心おも や
一 をの〳〵 已 や 一 行 さろ ば 奥 中 い〳〵 又 奥 も い
名 有 や
一 おはく 侍 者 女 を 云 或 は 許
一 おごろび 生 や 一 をごろび ろ や
一 おはい も 大 悪 已 や 一 をひれ ろ れ び れ や

一仁いさゝか 紀詳也 一れ 也ほんとゝも む れ ごとゝし 所
一あらゝかれとゝも 所のさゝゝゝ

のれ時、令ニ作レ公絃ニ一ごとう、偕楽窓の窓よ、垂ニ窓やあつさ
琴、おつまごくもいみや、暗も明も記云、和琴ハ元ハ弓六
張をゝ引並て、開けるを、後ゟ琴ゟ作ゟ
一わろうめると、哥ハ皇下や、一わろハやミ、癇病、疝ヨて
世俗ゟをゝろとゝいゝゝれるゝ
一わんとをゝる、王家ニ等倫王孫ゝて、姓を不賜平人ゟ
一わゝ方へいゝゝろ、令妙まいゝろ時、体息すゝ病ゟや
一わゝさゟ共い、幼着服不蔵光者躰ニ温悪端ゟ寒ゝ気
俤入ニ皃中ニ幸ゝあゝをゝてのゝくゝ
一わゝれのれゝ〜なゝ、山澤式河海花鳥ニ委略ゝて、御門ニ告
ゟ入ゝゝ指をゝゝて、欽王の額ゟゝゝて、家ゟ方ゝゝ

ひさかたの　作者未詳

一わくごの後こころのべて　おほやけにつかうまつるほど
て、深く棄命（サンスイ）されていだされぬや、新墾（ナンコン）居をろく人のゆく人出あ
つまりとのさとやたのむ行く致仕（チシ）の表（ヒョウ）なりて、陪
席（ヘイセキ）のうちにとりつづけうたふに、父あるべくとうたへんあ
ひだをばうつの心や　　哥（カ）あり

一わくごの海、海乃（ウミノ）
松名や、ある一本よいまうこうもれくあらそふくうもれ、松心
ちづむ心や、塩（シホ）みのえ（アシ）うめ、三うせこみるうや
哥（カ）ありや

一わくごのなるうつむさうれ心を頃（コロ）るめ海といふめうさ
ざえ心をうめて　　哥（カ）の合（アハセ）

一わくれこうくこうをを
ふこうもむこうなるとののて、別（ワカレ）の指（クシ）を指（サシ）なやこれこう

つけて、おやうりけるを中よこのみさん心や

一わらべてうりけるを　一ことくさ、家へとむらさのみるとくのみん

しるや、くるて抱いてそるをしるさ、それ何を統云うるとし

るもれごもそれ心や　一わらはあをる御のうちこうぐい

きれのあるあ名あをれうちさ、御のうちこ紅梅うきれのお

うちをうちうや

一わらは母父ま事　あといろ

やう繁くあくさしうる名や　一わらくうること　本朝うけ延喜聖

代の時、落家をお遊をうくうるうぐ統之うれ

一わらはけて　名童気や、おうぐうちさん心

一王女れうて　王女けし、王孫を云や、余雀院皇女昌子内親

王、泉院女也、繍王女れ云ふ王女れうぐうず、姓とも

昔ハ男女ともに一わらんべとも云ひけや
ひさくまき 有五家髄脳又演成或ハ拳七病喜撰式ニ
八出四病除妖髄有八病是等や
一わらんべとも云ひて 内裏より侍
従人ぶ来階のもとにおむくて弁童子を
高声に読ませられバ不詳これハ六条院ての
ち紫上を呼べし 机よりとつて歌を読ます
百千万ささめきて袋のてうちに結ぶこゝろは
まゝごとなり
一わらかこの髪や
一わらんべとも云ふ 皇慶辛酒や
一わらんべとも云ふ 四月天気和且清緑槐陰合附堤平 白氏文集

一 うらうらにてるる心ちして和の字や
哥数のくハ
一 わやそれ哥のえことさハゆうの心やをしへなんと
若と
一 わかれまのうら絵 をの南日み日や 例多くて源氏のれ筆をま
葉まて院給や十二行若葉七行若葉行海老
一 巣さま まれ岩れとハ深と親てそうら給へ一本
れバくるまうハ松もれみやるもれうされる心や
一 うふれあつまれ 一 うらのうらて 玉乱付や 手
弥のれ指行ハあれどや 一 我やのか 二本望月の心や
一 われのうや 我や知うらいと添てうけゆうハなうられおもて
うらさんとやめれそふ袖ハ指とみとれるうべし
一 わけゆん かくくんもてなうらけるてめれうん

一ワラフ如ヒトシキ 菊の花
を賞メテ ソノ多キヲ
撰ミ折ル可シ ヲモシロシ
一ワレモコウ 武蔵野ニ多シ
一ワスレグサ 萱草 婦女ヲ忘ルヽ
一ワスレ草 緒ヲ
一ワスレ貝 嫁娶ヲ
一ワスレ水 志ヲ
一ワスレ草 寝ル
一ワスレ草 食ヲ
一ワスレ草 飯ヲ
一ワスレ草 琴ヲ
一ワスレ貝 唯識論曰ク
一ワスレ草 我妻ヲ
ユヘナリ
云何ヲ憩不顧自法執ニ
ヲ小堂栽ル
ヲ忘ル
ヲ
ヲ
ヲ

行為業河無慚法師或懺悔や

一われくて月の中にあるぐ〳〵ぬと可心得

一わらふ多座や一わけもなう無依良

一うろまよ虚偽うそや

一文衣四位給女の恐るゝ門の内脱をめくるる時あり

ひのよくもうそうそて文衣とつふやると

一かんざらめ云卿や、たゞたゞにたゞれゆよとゑるる月卿

とゐつも云卿や一かつうき露をする心や露

の字や又冊一かうるれうげバ可畏

う神日本紀恐心やれうげバ天まれ給や

一かうらうて　いうふ（ウ）ーことハ（ワ）生（イキ）ける命（イノチ）をうばふことの心や　一かうごとをとうくも禁中（キンチウ）にて文永のころもうくもちゐんをねんごろや

一かうごけるさうろんといふも同心やなをれある心や

一かうらうて頂（カウヂ）く　一かうらうに頓（ヤウ）て

一かうごとうてつけごうや　あうらうてうらべうに指（カウ）ちうへをく

心や誰（カト）うーむる心や　廿事（カコト）いうーうる心や

一かうみ河記念（カタミ）　指仏信（カタミ）文集

一かうらうらうやと文永のうーうに大うる人を送（ウク）うれど（モン）うへのうをうて　おーうる用をうう

一かんぎー　金叙（カンザ）

一かうらうらー　無（ナシ）風情（ヤウ）

一かんえん　都やうぐ同。えんさあることもうえんごうむべし

一かゝやくひのみこ　一条院のみ時。二東門院のみ入内みて。後ゞ壺ニまいりまさとくよとるも。業兼物語なる。当代のみもさゝゝゝ物語ニあるし　一かゝるのみ将　従ゝあれども

仍物語よ。るのみねうえあるまで。凡人ゞゞあるさえこのみさ。光源氏とるのみ将と同時代ニハあれども。栄花ニ

もあまでそ。ゝゝや。家まで。一巻の序や

一かゝること　頓　一かゝること　庁方　庁廉

一かゞゞひゝゝもふ心や　一かゞゞるも　さやゝるも心や

一かゝるかゝる　上のよとゝゝゝもゝること

一かゝれゞゝあれゞや　一かゝるこる　なまや

一かやうにうずくまりてゐるやうなるものや
一かくもあるべきにもあらぬ一うどあるや
一からうして幸(サキ)や　一かれうこゑ　なげるやうの声
一かうらん　桐(キリ)干や　おどり　面
一冊かきあつめ　此家の女首(カシラ)や　ぐらく
あるべきやうもなし中川のこちら面ひのふとや　此辺奇
うきまくりて　行くとそれ来る　義法(ギホウ)信法(シンポウ)両国の坡(サカ)　亜米利加(アルメイリカ)
やその森(モリ)のお伝をくらわされバ等(ラ)身(キ)大にてくらやう
にて近くこれをそれるバかりあるもの　私(ワタシ)ハ年寄(トシヨリ)
ですからあるべきるとも等身大(ラシンダイ)の人形(ニンギヤウ)の事なれ
ハ
金集
物(モノ)ずきあいこうつけ　きざ　ぜりふ　ぬきうつし

一かいまみこ　恒(カイ)見　物ごとゝかゝるとも云也

一かいもち　且(カツ)やくと云事もあるべし

一かどいまつみのやうなる　今も門をあけおくするふ家(コヽ)

のさまなり

一かどたなをさし　肴どうとして

中門(ちうもん)のさまなるべし　一かるかやとぶく　片(カタ)帆(ヤ)

真帆(ホ)とのみいふものでもなし　こゝはあしきなり

一かぐらこれ神　大(タイ)ヤとさしてかぐらこれ神おろしや山神樂(シ)

とうげのやまめくるを

毛詩(モウシ)七月篇(ヘンニ)云　八月在宮(キウニ)九月在戸(コニ)十月蟋蟀入我(シツソツルワカ)

床下(ユカノモトニ)

一かぐらて　田(タ)やうやれ心(カヘ)

一かぐ　鶺(セキ)鴒(レイ)　水(ミツ)をまはるをいふ

一秋事　九月八朔日より内裏の秋ぐさや三十ケ日を
織りみれば　より　禁内叶ぐさや

一かくとめくる　うちけうとうちとくるそれよりて
とくやくやくあるをけうとけうとくるとくるとくる

とぢめ文の王ろくひよ。き國の四人の王れよ。行むりひて
ろうきしろうろう。吉祥天女の牛緣よ。作り又安蹟
元龍主の八歳のめのあも王の妻ろれし后といそそ
ろ。遠ろく作り　一かしれうろくくそぐれる
昔ハ尼と云も髮といそぐろのよろもろろむとのろ
一かほいおくすろるて　ろろのものそ。ほのおくゆろや
一かんざし　おろる私時はんざしをれどもうこおけ
ろろぐうりろくうぐろとりふろやや
一やうろる人のろろし　大法のかおおぐして。ろろし
ろろこいせの笑も心いろろ取あびてまろうれいや
一かのろぐろる人ぐる　昔ろ尼老ろ源氏のゆろをびせる

のてうと（ヲウジ）清水のこうものひーこうぶえも
一かのうつるを　源の小柴（コシバ）うそぶのみ尼（アマ）ぎみうるをいぶで
そくのくると　尼ぎみのつぶんーのみも
一かのもののひるくん　紫のけぬのうえ
一かうやう　うやうさ云心や　一かずまへ　源氏のさの人の数（カズ）
一うへのへとや　ぐずまへいうずさ云心や
一十月　うえうづさとよむ　一かうさめずく　若内裏よう
まろさもる退出（タイシュツ）の時　うちさめ袴（スカタ）おぼつるず　づくうそる装（サウ）
束（ソク）等（ラ）あくるの給元　一かれつえて　そくまうれつ
くといふよりて　ねつえてぐちのんこととくよあうぐちむる
ぶをぐちて抱いうめをいふや　ねつえて抱いうめこと。

論義の時。講者。ねごいくだし。威儀叫聲を
打ちて。そなへ論義をやむるや。その心ともを通ずるなり
一かうもひとしく ちうぎもそうおさめや
一かうのうちぎもうち場や。さうじ同ずるや。一もて体
一かうそ 一かうそ 人をこえられ心や
一かうひ 如きの凡人のうちのうちるさはや
一必陵頻伽 聖主天中天。伽陵頻伽聲。法華經伽陵頻
伽在声勝衆鳥うち或迦樓賓或云伽陵頻者梵語や伽
陵ういこの中よりいでや 一神ちぢめてけづき
大悲云。いうぢう伽ちといやうて同者死哉の大悲乃
拳ち。富小路の内息方の御腹の親王の七歳にて。奉まし

さてめくりぢごくのありさまをみるに方八里
これぬ人ハはるかさきにいるやうにひろく
にるをみひらくに山の神ぞでくとうとけり
一かいもろ　舞臺を拵のやうな立ぞろをいる
代や繁昌や四十人のいろ〳〵もまだ筆語に四十人乃内
有二序二人一破二人一拵代三十六人そく山地獄ゆきを
をいみよ〳〵もよせもさのそ輪臺の拵作りて舞臺
よる丸立めぐりや
一かざりのまみち　舞のうざ
ーこいまことの立まれ殺をもおもふ人にてもろ話をもうざりや
ちろ通うとあれどこれい事れ記錄するべし
一かんごちめくちいこれ　これ官をすゝむといふ

一かきあらそぐろ　御ふところへうちはをいくろ

一かもりの　編笠をうて扇を作和けるや　等の扇や　仍而扇

の異名や　拾扇ありぐ

一かくさうろあるとろん　定家ていきやうい　観行なよし

ふ云あるぐいひそんろる　女院行も　御年や　鄭玄のめのろ

山伏　まて天のまーすをゑや　文文ゑし　卓文君　白頭吟と云

哥とけくろてあれば　目る　相如これをうて　義と心けるや

一かくれもろ抱よ　うすき心ろは　深き心と

一かくろといさろにをいろず　花　詠高ふいれ抱ぐろるとて　舞

未あるー　仍天暦三年三月十一日　二条院学寮陽成院

十二日　内裏仁寿殿学寮　各有舞未即　饗春鶯囀　又

地下(ゲノケ)給(タマ)へぐらうそて衣上の事(こと)にも成(なし)物(もの)のるゝ(ゝ)而(て)
乳(ち)もあれそ。おおよるもあるくらうるもの
一かうじもえうるやら寸(すん)侍(さぶら)所(ところ)也(や)秀逸(しういつ)なりと申(もうす)感(かん)
じそうるやう寸(すん)。御(ご)一(いち)のもろこしくるん
一かうこうべきやぐら(ぐら)なつぶれ所(ところ)そうと令(れい)ぬ(ず)と(や)也(や)
一かうこう(ぐら)うるもをろうハ下仕(げつかまつ)まてもうるうこと
八上腐(うる)のるゝ(ゝ)也(や)汗(かん)被衣(さしぬきのこと)上(うへ)よ(ゝ)為(す)るもの
一かうけ豪家(がうけ)やくんもんかうするそふ(ふ)也(や)
一かうのぐいぞんうるう衣上のるうなぐれするる事
衣(ころも)この寸(すん)分上(ぶんしやう)の雑仕(ざつし)や(ゝ)従物(しやうもつ)るもかちるう寸(すん)。そうるとも
いぞんこうふい一貫(いつくわん)るも名(な)なるや(ゝ)近衛(このえ)のお盛将曹(もりしやうそう)有(あり)を。

一人つゝそのあめりかてつゝ人をいつも職(シヨク)
をうて隨身(ズイジン)とる爾つゝぐらあつて。出仕(シユツシ)のつぶよう
るめりくするやうをかはるもるがのて一人ぐめりわる
を代るみ隨身といつも。交代(カハリバン)。御令納(ゴレイノウ)なれ大将(タイシヤウ)米(ベイ)
仏(フツ)の番長(バンチヤウ)丁人を添人すべて六人の隨身をゆうされ
てめりぐするもるそのうくる拝賀(ハイガ)もぐれはし相盛(アヒモリ)の曹
司(ゾウシ)を一人で奥(オク)する代。丁寧(テイネイ)をもうれ隨身ともをも
いづれもうれ地下のこもぐらや。第人のそうごい。第二の第一
人の相盛(アヒモリ)をつふ。それを丁寧(テイネイ)よぐするう。御(ゴ)ふるう。
又行幸(ギヨウカウ)のはいれ。右(ウ)を添盛曹司(ソヘモリゾウシ)お陣(ヂン)よ代(カハリ)をするうよう
こうるれ丁寧(テイネイ)よめりうるうもるるやう

はのこと染心はべるぬ。別よる代そるもべし
尋ね侍ふ。此物語の富言し神こ心はべし。源氏そるは
りんそあよめ計書こそるもべし。狭間れ説

一かこそるめそる つぐ切る中へ髪とそる入也
一かこ一けう心で 八十氏人くらは。あそるれ人なあのめる人
よこそるこのくう 後撰者曲。賀茂条の日祐尺こそる。ふう
引哥別よる

一かうごのそこ 髪之のは仇ちぐ入れ也
一かうくこう 我こ愛也
一かんづる 外日也
一かこそるは そるこの枝こは。弱めづるそるこもそるこれ也
一かうこのそれそる人 秋安群行の日は。祐のそれ穢のる

あら・惶(ニク)の名うて中(ナカ上三)古(ふる)ゆ所(ところ)なりしものを

一かけまくもかしこき延喜(センギ)の御(ミ)代(ヨ)に

一かもれいでましし事(こと)のみ給(たま)ひ

徐王(ソヨウ)・そもうこと

徐王為(トイシン)攻院(オイン)の御(ミ)母(ハ)文徳(モンドク)天皇(テンノウ)の皇女(ミコ)仁和(ニンワ)五年(ゴネン)卜定(ボクジョウ)徐王(ソヨウ)

御(ミ)世(ヨ)一(ヒト)夜(ヨ)の御(オン)ゆかりもあるべきことなれば

一かけまくも　秋(アキ)をいかにこゝに昔(むかし)おぼゆる心(こころ)やおさがからん

ひしるるがあれば

一かしこき　辞(ジ)退(タイ)せし

一かしこのうぜしこと　軽哮(カルタケ)朝哮(タケロウ)せしこと

一かしこのまれをいれ　天雅(アマツカヒ)彦門(ヒコカド)之湯津楓樹(ユヅノカツラ)旧(もと)事本記

一かしこきこと　仍(ヨリテ)楚屈原(ソノクツゲン)そるされしをいふ

一かしこのれる代(ヨ)　仍(ヨリテ)縑直(カトリアタヒ)衣(ぎぬ)

一かしこのれる代(ヨ)　仍(ヨリテ)縑直(カトリアタヒ)衣(ぎぬ)

絶とうるとと絶絶とうること絶や 紙は芭蕉の平絵の画夜や
白装束のうるもうすき絵や

一かんの老人うくへる畔 地ひろき月も公任とうらめやも
一めぐりとうる 鷹櫓うって 落れ声とうるうすする夜ごへう
ぐりれをも同一

一かうる地はうる地はうるうる
地や 或海岸地ごころ畔 見ちぐうへ一 純周ノ字 松ようる地
うるをば あさうごろ

一風よあうていぐへ 胡馬嘶ニ小!
風越島景南枝 馬ハり〳〵胡ふれ歎や 仍れよあうれで 旧望をうるうていうもや

一かうるうごつよをや 廣凌
散ハ琴の秘曲うり 秘康り華陽の亭うって 紙人よあてつうへう
典や 林人ハ首れ冷編の愛紀や 一かすれ仍れ大納言 獄真令

ム。大納言二人ゝ。今の文のごくもるべ。二人のかいうどもう
かゞれば侍のまさくるべき。寛平遣唐の心也。二人乃うち
一侍官あるべき心也。ゝまれる官のかとゞ。いうまも侍乃ま
とうべきにして。源氏も侍大納言ごいうれの事中民ハ四下
人侍十人ゝまうる
一かくる故よりて。遣の人ゞ
一かくへ十づゝ 十列ゞい東遊の舞人十人ゝまる事ゝ。おをそ
ゞこゝ地をゝて。神社の行幸。関白の賀茂春日行なゞ
石見ゝて。社ゝゝて来まうゝ。舞ゝて。馬場ゝて。馬を
ゝするまる。ゝれゝの右近の官人ゞいゞむ。八幡除時
祭ゝゞいゞ。雲客舞人ゝまうゝ。源氏の去伯告まゞて
まゝ。ゝへ十列ゞ奥ゝまるまうべ

かりこれをこれをいとまごひて 長徳二年 八月九日 出
ダノ 干時 堂爰 古人 辞 右大将 河 日へ 詣 ニ 随身 二 三年 十月九
日 勅賜 ノ 宅 ノ 京 ニ 清府 生 各 二人 ヲ 為 ニ 従者 一 従 ニ 侍童
みづら 今案 ニ 従者 ハ 為 ニ 従者 一 ゆゑ 侍童 ハ 為 ニ 従 一 ゆゑ
すゝらこれ 装束 の 名 不見 る 水干 ニ 侍 ニ
や うちきぬ べし や 侍 ハ 侍 ニ 侍 ニ 侍 ニ

一かさつんころ〳〵ころつん方ろもも此時分明石の冬の冬も
一めんやぐらにりんしきて呼じいして張ようも紙屋の人
初て色紙すきそめとやらん此さハ唐綺やうのみすゑし
一かうもいろ〳〵ろろそて紙をつゝそもこれハこれのやうなる
ろ〳〵ろ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ

一、今云や、妻信礼哀哉也　一かうべうなだれ　涙ニ中笑云利よ
元妻ヲ　一かゞひろげさをのゝて　咩秋好
のさいそいて、添ぎの一門も繁昌ぞんぜよと也
一神さびよけう幸月のうう　添の久ぢき意義の為云神前ゝ
神宮ニ久へそうぶ成心也、又久後也　一神つぎうよさまう　落雲く
れ給、桃園家ぞんぜ給ようてや
一かうつゐて　雪もよい雪の花也
一かうつの下ル　祭の奥ゟ挽いうようてさあや
一かけそやいうけさやいとひけさやいとや、繁栄のル様そ
なうて、除服のうそぶうんとうや、荻園ようへくう
一ルのちうけぶーすーまー　文選豪士賦序ニ落葉俊徴風ノ

一隠而凡力蓋寡。凡力多人。而心中已貶。ぢねば不成さまや。
今いふようても源氏のちごつうるさと云心もつべし。おくさん
もの不可成さまも
一凡のまゝ行ふ凡生行表窓
間卜月廿二日和時墓上行朗
一かけていへばうけていへばいひ
くれいや。籠のづく後日うけとるまで日うけ共いとをぎ
うて辞や。袖よりけしもいかよ。ゑ。こと後ようあるも
むうつう
一かいつのちよさうあるさて何撮練いふのうすき多や。いわち
のまゝをあ着てと云べき後略しくち後撮練いうすき記の
さあのわちうちうを云。お中びうとはかぬをさうや。給もど
さていうくも落ぶあとど着うべし
一かくもの賛
一かくもとうぶやうこと

そらさ　唐東東錦　日やうも　かさて唐の物れ上巻　名　今業
　白地錦（にしきの）と東京物とをへても　一かさねのうちさ
きいれてうちあはせ　ひとへとも拍（ひょう）いさねのやうに必着（かさね）やうさねとも
さねるどあるともあるとも也　一かさね　三　辞の神うへも神也
一かうごれ也さるれうち名今業　高巾（かうご）ま冠（にしき）ごと高（たか）ても
ふち白き絡（まき）ても也　ふち　義人　ふち也　ふちめ　六位蔵人
のうち巻を着（きる）て　かうごうち拍（ひょう）緑のおてとうふうち
そうち巻ふちふれ　姿（すがた）ふちふてもざるれうとはいふち
一風ふけ　波の巻さ人　蜻蛉（かげろう）日記　二　石山ふてあて　ふて　いづさ記
山（やま）の海（うみ）ふど云ふをふてお　れ中ふち　ふおおい云ふ　ふも
近江（あふみ）の名ふ　ふべし
一かふれうへの山も　不見（みず）　三　蓬（ほう）来（らい）

不敢殴童男童女舟中ニ老文集

一かくのごとくなる 喜春呂也 及音ハ呂ようの律ようつを云也
喜春呂ハ黄鐘調の呂也 平調ニもつて用ゆる也 二変徴黄
鐘調も律也 呼くもつて心得べし 律の呂ようの也 呂律次第
一かくのごとくなるゆえに 大日如来神也
一かくのごとくなる 大日如来神也 一風の吾秋ようのあると 秋風呂
の心也 平調ニ次第 盤渉ようの
一かくのごとくなる 変徴ハ花のあるようなれども 諸悪業ようの悪也 古今
ようハ悪ようのこれあり 一かくのごとくなるゆえに 日
本紀第一ニ云 天照太神 踏ニ堅庭而陥股若沫雪ニ蹶散 今業
ようこれ若ハ雪ようのごとくなる也 そのごとくなれども 悪行を以 照太神

のいつものくるはまつすぐなものりさへ
をしへまもる弁の神ことわりいるれがとをしへまのりこそまもるべき
一かけくもるさ　　恥やカケ

一かんのあ　御侍督オイエノカミ

宝よ和でも女房のうらめべし一かうや　雑仕ゾウシ

一かずかずいろいろのやみ月をかせ沿ソウ

ときぶめられれば月ぞうき命をうらむとぞ
まれそう

一かの流いうぎ乃まうもう紙　家和ヨカカ嫁合オトコカエラス男

と云う添ふとやをとけうろ乃くちいろねぞい密通ミツツウヨシの由やし

一かるのやうにて父フレとう敬ケイ也一かうけのの　賄カモノこうもとうとも

一かそう　菊キクノ菜ハナツ乃莖也一葉ハ梅

一かすみぶる月を　月影を露

へぐてどい・島もあんと吹べし・ふこ笹を感じていくち

一かんなのこ 俗名を本・何時始起て何人言給ふ意見・往古ハ和訓

ハ方葉・日本紀の哥ハ猶や

一かくさく なのふハ

かくしても 其の名いあらはれをこ お猛ハ夕ふ哥ハ猶ふく文章生

うてあるしをいくち・乾猛一枝梟山斤志今ハ課試及第を

受給ハ業風ふうの業の風や・博士よそへふるや

一神亀元年九月廿日あふきの日ほどに六条院へ行幸ふ 扇保二年

十月廿三日・村上天皇行幸朱雀院ニ小弁をうけしてをこ

かへる後 暫有朱雀院ふる・漢武帝ハ柏梁殿ふあるごふ

ふや・東ふぐれ哥や

一かくいふち時 仏をくふち

笠ふすもの

一 皇恩 何 処も六年月十六年内 皇恩 万歳ぞ
よ〻此記よろこぶ
一 かち弓 歩弓也 中将 大将
一 かけ物とも 勝負の 賭物也
白社家の時のもの也
一 かくもあそ ろぬきそ とも
一 かんぶつ 神寶也
一 かくさうへ〻ろ 等の ものを一口ろ引て 取手 ものを
一 むすびめろもろこびようろ 琴 引 酒 盛 むすびめ也
一 かこまろ 鎧 着 兜 弓 矢 刀 鎧 着 兜 弓 矢 刀
一 かこまろ 鎧 着 兜 弓 矢 刀
とも知ぬ〻とも也
着 兜 弓 矢 刀 とは 左 右 共
着 兜 弓 矢 刀 とろ 物 鎧 着 兜 弓 矢 刀 別 紙 ろ

一かんこんのこうもい　唐織物の小紋や

一かうもちもの　諸荷や　一かんこうもち　告白ふくず

一かすがの　合衾して春日なる　伊勢なり　ます。いせ春日なる名所の

物こや　中ぎれは必ず氏ある。秋好の中ぎれ古桜柱の脊ひきのひしこや

一からぶえ　うて笛や　一かわらめぐり　あやしよし心

一かうこうは　暗夜に高灯籠する趣　一かさあわさて　袖を早ういあふす。

一ふるふるとあられ神や　一かうれげようづういあふずや

新人の将院そい前なるしいふれげようづうれあるし

ここしこと也。ひげ忠の娘忠の籠中こてこをしゆへや

一かんおもう　ここりんおびおぶ。ふくのすをを物や

一かんすいふく　酔醒ましい太鼓や　ふあるは真似あるや。村上

記應和元年閏三月十一日夜宴舟糸養酣酔糸舞人四人云々
又河水糸と云ふる
一かぐーあり　うたーあり　さゝ作も
るるへのるあよあ〳〵ぐ・芸の沢なめひゃひめみとあるべー
一かせうとて　風心うとの心や　一かづーひげ　髪髪おもぐーひげや
一かぐーを　古ゆ　焼て芸・おもぐーぐーをおりてこゝろーをめりるや
一かゝるぐあふ　除服や　一かべの中ゝさうぐーや　壁のつ
ようれのるるをや・遠壁暗蓑無限思・真寒燃赤敵敗糸天
一かいせんらく　海青糸　水色のなや
一かさくもり　芒明る日落のうぐーをろるるを・心ごもりれぐ・
田うげをうめぐをや　一かうえ　勘当や
やうるま
一かこの町　二ゝ町ゝ野てや　一かやぐ　うたーを心や

一かう鳥　姉（アネ）さまと仰（あふ）ぐ心（こころ）やうく仰（あふ）ぐ思（おも）ひや声（こゑ）
うつくしくて抱（だき）て寝（ね）る心地（こゝち）　一あふむや（あふまや）　庚申（かうしん）

一かうこうちるぞうそん　中（なか）も抱（だき）ひやうさ舟（ぶね）もやちがうそんと
やうこそいさゞいや

一かうおとろけ　おとろ腹（ばら）のさも
世（よ）のさまひや

一かけろ　れやきろ〳〵常（つね）

一かのうぐいす紙（がみ）　若（わか）き人（ひと）ぞ是（これ）菜（な）并（ならび）に花（はな）ぬれ露（つゆ）滴（したゝ）る
者是（もの）人（ひと）現生（げんせ）口中（くちの）掌出（しやうしゆつ）蓮花（れんげ）青（あを）光（ひかり）毛孔中出（もうこうちゆうしゆつ）千（せん）釈梅檀香（しやくだんかう）
法華経（ほけきやう）

一がまけろ　降魔相（ごうまのすがた）不動尊（ふどうそん）
念怒（ねんど）のおやであるうりこう心（こゝろ）や

一かうさ舟（ぶね）　鶴（つる）や亀（かめ）なんどと鶯（うぐひす）
らしくう

二かうさうさ　天雲（あまぐも）雨雲（あまぐもいん）何（なに）そ
一かうこと紀（き）ようのうさ　出雲寺（いづもでら）

恒さゝそせうの修験ゑ　一かゝられてもあくまで法しれる
めでいくら髪の毛あくまでなげ立てくらもふとりめうもちをんとも
一神もなど　神かな心経よむもうるべし
一かざらそと　一生勇めば　一風のまぎれ地獄のかのはな
風のまぎれとそゝ　一かくさう学生や　一おれを不離や
一かくさう　大やけけ勤めりやうじ勤尚文選宋玉風賦曰
一かせこうげふ思ほよふきちげりべよ
歴石伐木梢殺林莽

69038
6AP 73